

昭和十二年七月一日創刊
昭和十七年四月一日發行第七卷第四號
（每月一號一日發行）

創刊大正十三年・通卷二百九十九號

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

No. 299



四月號

麻生路即女主人

川柳の雑記

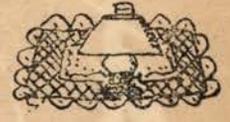
四月号目次

題字……………麻生 路郎
表紙……………石田兵太郎

漫談 医者と川柳……………北川 春集(一四)
給ころ詩ころ……………戸田 古方(一九)
酒 放 談……………表 天貧(二六)
窓 口 談 義……………麻生 路郎(三三)
櫻 の 句 に……………安川久留美(四四)
二番目の川柳村……………丸山弓削平(五三)
座 句を中心……………(六〇)

養子の立場……………木村 水堂(五五)
ハテナ?五七五……………花岡無名女(七七)
モデルのある句……………諸 家(八〇)
飛 燕 往 來……………(八七)
BK放送川柳……………市場没食子選(九六)
川柳とBK……………(一〇〇)
二七年度募集課題と選者発表其他

不朽洞句帖……………麻生 路郎(一三)
近作柳 檣……………麻生路郎選(一四)
川 柳 塔……………麻生路郎選(一七)
同 舟 近 詠……………諸 家(一五)
一路集「アルバイト」……………中島生々庵選(二七)
各地柳壇……………弘津 柳慶選(三〇)
不朽洞会から……………(三六)
不朽洞会名簿……………(三七)
動 静……………(三六)
編輯局にて……………(三六)



窓口談義

麻生路郎

里田一十氏から次のようなハガキをもらった。

財産として「ホトトギス」子に譲り(伍健)を数ヶ月前「川雅」誌上にて拜見、虚子年尾が天下の公器ホトトギスを私有財産として譲渡した事に因する憤懣と解し、実に痛快な川柳と釈解して友人にまで語つてゐました処、本月の評釈を読み呆然としてゐます。

と云うのである。このハガキを読んで、こちらは呆然とはしなかつたが、「ナルホドそんな親方もあるのかなア」と思つた。句意が二様に解釈される場合は往々にしてあるが、その多くは表現技巧の拙劣さから来るのであつて、右に掲げた句のように特殊人による、特殊な解釈が二様にされたことは珍らしいとせなければならぬ。

里田一十氏は柳人としては日が浅いが、俳人としてなら松山の子規忌にまで出かけて行くほどに、俳人間にも知られて居り、古い作家でもある。それだけに、俳誌「ホトトギス」を子に譲ると云えば、直ちに、子は高浜年尾で

あり、親は高浜虚子と解したのであるが、それは樂屋落の観方過ぎない。俳人間の公器である俳誌「ホトトギス」を私有財産として令息に譲ろうが譲るまいが、世間からは問題にならないことなのである。まして「ホトトギス」が俳人間の公器であるうが、あるまいが、コレ又問題ではないのである。公器云々と云うのは発行権の問題となるが、川柳に詠まれた「ホトトギス」は過去に発行された多数の俳誌そのものであつて、そんなものを虚子氏が年尾氏に譲るも譲らぬもではないか。

伍健氏の川柳に詠まれた「ホトトギス」は永年購読を続けて来た手垢のついた数冊の俳誌「ホトトギス」であつて、その持主の父が問題なのである。清貧に甘んじて、俳句に没頭して来た俳人の父が、穿ちの焦点となつて居るのである。俳句に興味を持たない息子にとつては有難迷惑であらう。紙屑にも等しい「ホトトギス」。猶に小判の「ホトトギス」であるからである。そこに一般的な父の立場と子の立場があり、川柳の批判があるのであつて、たま／＼虚子氏が令息年尾氏に俳誌「ホトトギス」の権利を譲渡した事実があつて、それを詠んだとしても、それは一つの時事吟であつて、しかも一般からは何んの興味も持たれない一事業に過ぎないであらう。

川柳ではそうしたものを取り上げないのが常識である。

結婚式場

6階

着付から美容
舉式、寫眞、披露
まで一切承り
ますので
きわめてお便利
てございます

金曜定休
大阪日本橋

松坂屋

最短時間を結ぶ

大阪一名古屋

3時間 特急

毎日3往復

特急料金	¥100
上本町發	7.40 12.40 16.40
名古屋發	8.00 13.00 17.00

近畿日本鉄道

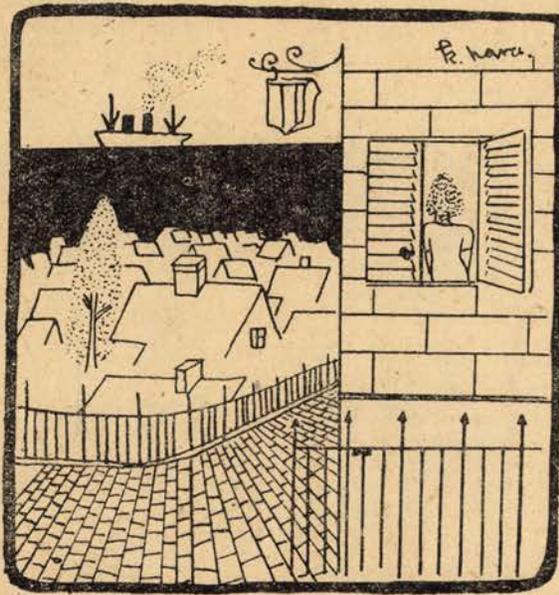
本社四月句会

處—大阪市南区三休橋南詰東入
(市電心齋橋が長堀橋電停下車)

大宝文化会館

時—四月五日午後六時
題—内幕・立読み・酔いどれ

川柳雜誌社句會部



不朽洞句帖

麻生路郎

敬遠をされてひとりて喫茶に居

遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る

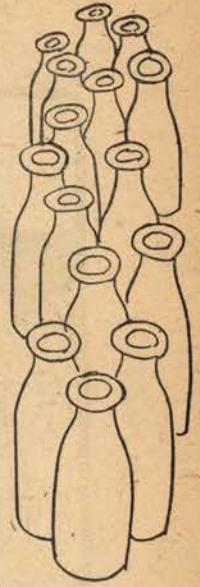
僕とこは二二ンが三の暮らしにて

苦の世界めし一椀をめぐまれし

立ち廻りの稽古もめしの種のうち

地震からやつぱし男頼りにし

火の見櫓これが職務か春の空



川柳 漫談 医者と病人

北川 春 巢

一、医者

医者と云うものは病人を治すものである。決して病氣のみを治すものであつてはならぬ、ごくせんも恩師小沢教授から教えられて来た。所が近代医学はサルファアミン剤を見し、更にスルファアミン剤からベニシリン・ストレプトマイシン・オーレオマイシン等々の抗生物質の発見にと進んで、医者は病氣を治すものでもある様に、変つて来た。病氣を直接攻撃する方法である。然し又最近のアメリカ医学は、精神身体医学など、云う、新しい領域にも進んでいる事を、我々は知らされてゐる。人間を一つの有機体と見るのである。矢張り医者は病人を治すべきであらう。

(イ) 古川柳に現われた医者
姿と云う逃げ道医者はあけておき (古句)

まで作つてゐるような場合であつても……。そんな場合、医者も何か云わねばならぬ。辞世の歌でもはめておく、と云うのである。

大道で脈を見てゐる小児科医 (古句)

小児科の医者が、患者の小兒をあやしているスケッチである。後句などは現代でも診察室に人形や動物など置いておいて、よく見かける図である。

(ロ) 現代川柳の醫者
専門のきまらぬうちに医者になり (柳秀)

下駄の数ははやらぬ小兒科医 (同)

壽命さへあればと院長如才なし (同)

耳掃除してくれと医者おこらせる (方正)

柳秀博士は医学部で医学生に講義はして居られたが、医者ではなかつた。方正博士は、耳鼻咽喉科の専門である。句意は明かであらう。

往診はこんな梯子をのぼらされ (たけを)

たけを博士は、内科の開業医で、此の句は戦前の句であるが、現在ならば、こんなバツクへ、と詠まれたであろう。曲藝の様に梯子を上つて行く我が身を詠まれた句である。

手後は一寸あてどく聴診器 (たけを)

此の医者は、辞世をはめる事もしないであらう。

くすぐつたそうに主治医は焼香し (瑞枝郎)

お葬式の焼香も、辞世をはめる以上に医者にはつらいものである。

石炭酸臭いで外科とあてられる (路生)

スラム街往診靴が臭うなり (孫拙)

医者と坊主は臭いで分る、と云うが、これは医者自身が我が身を詠んだ句。但し路生博士は外科でなく小兒科の専門で阪大名譽教授。

る。

突き放し (路郎)

病人は自分の病名を知りたがる。病名を立ち所に云えぬ様な医者は藪医と罵る。身体が悪いのんや」と云うては承知せぬ病人も、「胃が悪いのんや」と云つてやれば得心する。胃の病氣にも十以上ある。

女医さんにやんわり酒をどめられる (春巢)

予防注射女医の前には列がのび (南冥)

親切な女医が病氣を長びかせ (十九平)

女医さんは死化粧までして帰り (方的)

往診を断る女医も身重にて (没食子)

戦時中の人的不足から、女性の医者が大量に出来た。女性らしい親切さはあり、物云いも穏かだし、大いに人氣がある。小兒科や婦人科、或は保健所の仕事にはもつてこいだ。然しもう一度手を握つて貰いたい若い男の病氣を長びかせる恐れはある。女の子が死にでもすると、死化粧までしてくれらる。然し彼女も結婚せねばならず、御自身の身重は如何ともなし難い。往診を断る言葉も、やんわりとしていれよいが、相手が悪いと不慮招の問題も起り兼ねない

誤診して菓子折貰う時も (一哲)

あり

つまり胃が悪いのんやと

どこの医師会へ行つても医者が顔を合わしきへすれば税金の話。真夜中にでも直ぐ来てくれるような医者は、税務署へ投書でもして、税金も負けて上げるようにして貰いた

仁術と云うを税務署見逃さず (春巢)

ある。医道の低下が歎かれてゐる時、こんな医者があつたとは、作者も余程感激されたものであらう。敗戦の今日でも医は仁術である。

仁術と云うを税務署見逃さず (春巢)

どこの医師会へ行つても医者が顔を合わしきへすれば税金の話。真夜中にでも直ぐ来てくれるような医者は、税務署へ投書でもして、税金も負けて上げるようにして貰いた

つまり胃が悪いのんやと

あり

誤診した注射の代も拂はされ (送路) 誤診をば風邪がこじれたなどと云い (彈正) 咳の出るわけを誤診は笑つとき (春集) どうぞ誤診であつてはし いと母の慾 (霞乃) 誤診も医者の特技である。全勢力を傾注した診断の結果が誤診である事もあるし、又是非此の病氣にしてくれと頼まれて、誤診する事もある。何れの場合にしろ、患者は感謝して菓子折をくれるのである。所が、先生の仰言つた病氣では、どうして咳が出るのですか、などとねじ込んで来る患者もある。誤診だつたからと云つて、注射代は割引してはくれない。若い医者は此の場合、極力説明して、風邪がこじれている事にするし、老大家はたゞ笑つて居るばかり、子供の病氣が結核性のものだ、など、宣言せられた場合には、母親は誤診である事をこい願うであらう。

二、病人

医者の方から云えば、病人には二種類ある。一は風邪引きとか腹下しとか、一週間もすれば治つてしまふ「短期」の病人で、他は所謂肺病とか肋膜炎とか、半年、一年或は二、三年もかゝる「長期」の病人である。後者を「療養」

と云い、「闘病」とも云う。前者は直ぐ治るのであるから、その間に深遠な人生観に達するとか、色々な悩みを持つとか云う事はない。句を見れば、むしろ病氣を楽しんで居る様にさへ思える。所が闘病の句に於ては、その期間が長く、且つ禁慾的生活を強いられるので、色々の悩みがあ

同舟近詠

東京 富士野鞍馬
女將のツバメ帳場に坐つてる
生理目を無理してタイプミスだらけ
アパートはわびし目刺を焼く匂い
神輿昇きとは目刺の愉快な名

松山 前田 伍健
お日さまと風が運んでくる春さ
企劃課は温室ぼどに花準備
淨るりは判らず青年社長飲み

姫路 池沢 樂居
九段で逢う約束の骨髄黃島

妻の風邪看護も嬉しいもの、中 (月仙) 病人を見舞えば裏の畑に立ち (梨里) 風邪引いて河合武雄の様な声 (潤年) 往診に風邪はあわて、床に入り (茶々) 父病めば子供は医者眞似をする (湖月)

り、病人でなければ吐けない句を吐いて、読む者をして或は同情の涙を催うさせ、或は感謝の声を發せしむる事となる。尤も此の兩者の中間の療養期間一、二ヶ月位と云う病氣もある。

(1) 短期の病人
早退の三十九度を云いふらし (日濤子)

寝させられ (湧三) 病名もつけず入院せよと云う (利生) 病みつけば一パイの粥ももて余し (春柳) 台所へ追手のかゝる病み上り (古句) 熱発で始まる病氣は沢山あるが、熱だけで他の症状の揃わない間は、二三日の風邪熱やら、二三ヶ月もかゝる腸チフスやら、二三年の肺浸潤やら、どんな名医でも経過を見なければ分らない。とも角熱が出たら寝ていて間違いはない。入院をすれば一層安全である。一病みつけば」の句は、少し長びいた場合を詠んだものである。古句は回復期の食慾の進む事を詠んであるので、矢張り長患いの方に属する。

(口) 闘病生活

二年三年と長期の療養を要する胸部疾患の場合には、あらゆる慾望を押えて、専ら勢力を結核菌との闘いの方へ向けなければならぬ。食慾は此の反対に、増進させなければならぬが、食慾のないのに、無理に食べなければならぬのもつらい。栄養の問題は大切である。

要注意者鬮の頭も食べて見る (無案) 養生のためならと云う虫も喰べ (愛鳩)

その上に回虫までが僕を喰い (山雨樓) 好きな酒、煙草は止め、好きな所へ遊びにも行けない。又療養生活者の性慾の問題もむつかしい問題だと思ふが、現代にはまだ此の方面の句は見当たらない。性的な事を口にするのを輕蔑しているのでもあろうか。

毒断の内は二夕間へ蚊帳を吊り (古句) 長病ひ二号を置こうかと思ひ (草一郎) 面会の妻いつからかハイヒール (月舟) 安静へ看護婦さんはきれい過ぎ (侃流)

古句の「毒断」とは、病人には毒であるとして食べさせぬ事を云うので、句意は分るが、これは單に客観的描写であつて、病人の悩みは陰に隠れてしまつて居る。第二句は妻の長病を詠んだもので、此所に云わんとする意味とは多少異なるが、療養と性慾との点で關係があるので引いて見た。第三句は、面会に來た妻の化粧・服装を詠んで居るが、その裏に多分に性慾的のものゝある事は否定出來ない。最後の句は、病人自身悩みを卒直に云い過ぎて居るので、深刻な悩みと取りにくいうらみがある。

療養中の病人で、流石に酒

の事を云う者はないが、煙草の方は止めにくい、と医者の前でも愚痴を云う人が多い。病氣には悪いと重々知り乍ら、その紫煙の誘惑に負けて、恐る恐る之を口にするのだ。見舞に行つた人が、病人の前で喫うなど、云う事は、病人に對して、見舞が却て仇となる云える。

足音に捨てた煙草が惜しくなり (小沢)

安静をやかましく云われるが、これも口先で云う程樂ではない。五日や一週間ですむのではなく、何ヶ月、何年も続けねばならないのだから、寝ていれば癒る病に多か

来た (月舟)

ぼろ／＼の聖書へ闊病まだ続き (芳仙)

パイブルとチャタレー読んで闊病し (北山)

安静を口実にして御無沙汰し (富多葉)

安静と云われて髪など洗いたく (同)

病人の顔あなどつた蠅が来る (若芽)

此の人は生き抜くと看護婦のカン (旋風)

何度目かの冬を迎え、パイブルもぼろ／＼にすり切れてしまつた。折々は「チャタレー夫人」を読む事もあるが、親類にも友達にも安静中だとの口実で、不義理の御無

沙汰を重ね、髪も洗わずフケだらけの頭で、ジツと寝ているのである。安静のために、はそれこそ顔へとまりに来る蠅を追う事さへしない。看護婦は涙ぐましくこれを見て、長い間身につけたカンで、此の人は生き抜く人である、と云い当てる。その中に次第に悟りが開けて来るのである。

「あせつては駄目だ、人の力を頼つてはならぬ。治るのは自分の力で治るのであつて、

医師が治してくれるのではない。」と。こう悟つた瞬間から、妙なもので病氣は快方に向つて行く。その折々感想やらスケツチを句にしておく。句には随分深刻な句もある。

悟り切つた句も出来る。癒らねばならないみんな待つている (富多葉)

弱つたらしい小爪が見えなくなつちまい (同)

阿呆ばかり云うて無熱の日が続き (同)

平熱が嬉しうて葉書五六枚 (朱人)

同病の他人の油断が氣にかゝり (眞砂)

院長が無口で頼りなく思

い (千舟)

看護婦に叱られている生

きてゐる (法界坊)

生きている証抱の高熱悲

します (富多葉)

に叱られた事も嬉しく、たまにびつくりさせる様に出る高熱さへも悲観の材料とはならない。かくして次第に散歩も許可され、退院も出来て通院治療を受けるようになる。

病名を本当にされぬ太り様 (富多葉)

義理の人来るに病人化粧をし (眞砂)

闊病が今日も蜂の巣見つけて来 (弓削平)

闊病に握りしめられてるすゝき (同)

退院を明日にひかえた笑い声 (富多葉)

治る氣の藥瓶をば下げて去ぬ (春雄)

これで先づはめでたし／＼であるが、病状によつては落付いた折を見て、退院の代りに手術の方へ廻される。

肺病と差し違える氣の手術 (無骨)

勿論、手術台の上で死ぬ人がないとは云えぬ。が医者として見込のない症状の人に、手術をする筈はない。精神力と云い、特效薬と云つても限度がある。手術をすゝめられるのは、見込がある証抱であると思ふべきである。

最後に特效薬、靈薬と云われるストレプトマイシンの句を見て見よう。現在では結核予防法と云う法律が出来て、

適應症の人々には、國庫負担

で無料で注射して貰える(お

役人の仕事であるから、手続は仲

仲うるさいが) ようになつた事は有難い。

ストマイに命を托し今日も暮れ (仙先)

平熱になつてマイシン痛

いこと (富多葉)

死期のびる薬と聞いてに

たりとす (山雨楼)

マイシンは此の場合注射であつて、内服ではない。腸炎

の時には、マイシンを内服する事もある。第三句もマイ

シンの事と思はれる。「死期

のびる」と云えば、まだ死の影がつきまどつている様に

聞えるが、どうせ一度は死ぬ人世である。差し当り死ぬよ

うな症状がなくなれば、助かつたと云つてよいのであるま

いか。(終)

筆者は不朽洞会員・医博

「迷信」

BK放送川柳

佳作

迷信にもうまどはない闊病記 大阪市 葉光

迷信を信じ切つての悲劇なり 山口縣 大然

里帰りして迷信が一つ殖え 大阪市 万樂

子宝がなく迷信を聞いて来る 淡路町 帆走

迷信を軽く笑つて聴診器 東京都 紅秋

めいしんと知りつゝ母の子供留守 堺市 隆春

迷信が碎かれてゆえハイヒール 大阪市 治一郎

腹帯をやつぱり戌の日から締め 鳥取市 日満子

その蔭の内助の功はひのえうま 群馬縣 風蘭

迷信にこだはる母とお仲人 大阪市 天國

熱の子へ医者呼ぶまでのおまじない 徳島市 安裕

迷信を笑つて妻の氣をそこね 貝塚市 千舟

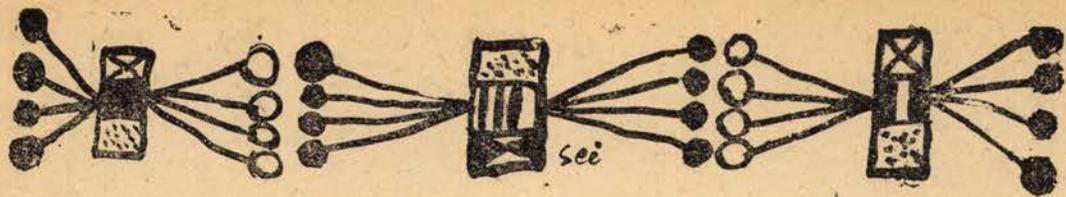
迷信の力で出来た様な國 大和高田市 方正

ちゝ母の氣持迷信逆らはす 奈良縣 つとむ

迷信へすがる老母の汗を見る 布施市 愛論

二月十六日放送

岡山縣 娘句樂



川柳塔

兵庫縣 戸倉 普天
急いで居るにまだ支店長判押さず
編棒が目を刺しそうな暮の汽車
孫の代には伐れるでしようの殖林し

大阪市 武部 香林
競輪で靴まで賣つて悔もなし
唯心論鶴の如くに瘠せており
草も木も日向ぼつこをしておつた
説教をやめ紹介状を書き
朝々の説経が人を孤独にす

平塚市 木村 孤浪
厭な日もあろうにアナの朗かに
意見しい／＼された年頃思ひ出し
五六人ざわめかして席一つ空き
塩辛で満足してる父になり
何事も運さと云つて友かへり

横浜市 福田山雨楼
まだ腹がでさず鋭く妻叱る
遺家族の慰問されてはまたけられ
細君連米持ち寄つて氣焰あげ
ホノルル 内藤草一郎
算盤を持ってば女將のきつい顔
本当に好きよと笑ひもせず云ひ
感情の傾斜を酒がのぞかせる

尼崎市 水谷 鮎美
家中が樂書となる子沢山

満月の下のわが家へ酔うて着き
二月五日潤五十二才の誕生日
丹前で師の短冊の下で飲み

大牟田 高田 抱逸
教育宝鑑
先生が籤に當つて寄附もせず
腹立てゝ飲みに出た日の損を知る

布味 市岡 曉舟
何か知ら云つてやりたいフラギョール
総会は役員候補丈け静か
醍醐柔道六段の偉力
何処でどうしたか醍醐だけ立つて居る

米子市 三鴨 美笑
病院を出れば粉な雪襟に落ち
別れる氣女だまつてたゞ座り
月賦でもいゝよ新柄着てやろか
ホノルル 白砂 旋風

親切に童貞奪ふおかみさん
教養の滲み出ていと謙遜な
大阪市 市場 没食子
再武装置炬燵でも是否の論
過去未來現在たかが公務員
大阪市 須崎 豆秋

特攻隊ちう本がまた賣れ出した
ヒリッセン交渉
八十億ドルでドキンとした日本
燈が漏れていてどなられた頃思ひ
大阪府 丸尾 潮花

雨じつと見て、見送り婚らない
猫抱いてるれば男が阿呆に見え
師匠曰くわたしは顔に惚れまへん
お化髪見せに來たとは云わす來る
大阪市 北川 春巢

結婚挨拶以後來てくれぬのも嬉し
禿げかけを女氣にしてくれるなり

奈良縣 尾崎 方正
雨上り虹は乙女の夢のやう
嫁き遅れアベック組が目浸みる
座敷の碁伸びたうどんへ振向かず
貰一本女の電話まだ続き

下関市 櫻川 不水
此処かアーン妓捨場で茶漬をし
釜山にて
人間を殺す優秀品ばかり

岡山縣 逸見 灯竿
玄關へ夫婦になつた下駄をぬぎ
親父から貰つたシャツに穴があり
女またオデンの櫛を抜いてくれ
岡山縣 大森 風來子
出雲市 尼 緑之助

酒と自嘲(二句)
酒を呑むことも仕事の一つとは
去年今年かゝる酒量がさみしいよ
想像にまかせますわどふてくされ
タバコ吸ふようにキツスをしてのける
大阪府 水谷 竹莊
下関市 弘津 柳慶

人糞の臭も郊外春のもの
妻の留守書棚綺麗に整理する
再軍備などと反対してみたい
飛行機で往く出発のあつけなき
下関市 國弘 半休門

長兄還曆祝宴
手品して甥や姪らを煙に巻き
パン／＼の事にもふれた綴り方
尼崎市 小林 文月



上チリをバン／＼らしきが買つて居し

大阪市 渡辺孫拙

あさましや猫の恋まで氣にかゝり

先客の余りに長い家族風呂

先客は上品振つて下座につき

解決のよろこび社長ねてしま

大阪市 富岡淡舟

僕もそう思うてる日曜娛樂版

易者の嘘まだ恋人が出来ぬなり

靴磨きおや／＼ピース吸ふてゐる

奈良縣 飯降白香

老教師牛のよだれのやうに生き

貧しさを忘れて雪を見とれてる

雪の路わたしの足あとだけつゞき

山口縣 長野井蛙

満員のバス警棒に割り込まれ

驛賣を千円札は買ひこびれ

大阪市 上田春柳

冬の陽へ大中小の足袋を干し

腹のたつ日はマツチまでつかず

朝酒のうまさおぼえた松の内

布施市 森下愛論

寒椿病む身に今朝も一つ落ち

孝行になる迷信は逆らわす

大阪市 松江梅里

福引に当り車に突き当り

友人の祝辞昔を素つば抜き

心配した辯に戻れば又叱り

岡山縣 丸山弓削平

接吻は未熟な桃の味に似て

大風一過キツスの後の紅を引く

岡山縣 直原七面山

公判廷キツスの数に念を押し

耳打ちはキツスさせると馬鹿にして

ピクニック子供の際を見てキツス

接吻が嬉しいか女目を閉ぢて

接吻のしやすい様に向きを変へ

宇部市 上林粗影

この吹雪吾れは孤独を抱いて寝ん

春らんまん刑務所の窓開いたきり

媚態もさもし人妻と知りせば

異母弟とはせつなきものよ十八九

遣族援助費出せと庭の蛙も一勢に鳴き

大阪市 西森花村

御免ねといつて仲よし先に嫁き

天と地の間をひよこ駆け廻り

外処行の言葉で妻に、おちよくられ

紅椿好きと尼僧のさりげなく

春の水身投げの様に椿浮き

アスファルト沙漠にも似て草がなし

鳥取市 河村日満子

青春をすりへらして日記帳

歸阪する妹へやる避妊薬

忘年会会社が二度もやりますの

買つてやるつもりを下手にこじらせる

兵庫縣 田代尋四

停年の友は淋しく去つて行き

誘惑に飛び込む勇氣羨まし

龍がいるいないで正月飲み続け

城崎温泉に遊ぶ

湯の町の下テラお客の格が知れ

妹の方が氣をもむ初な姉

逸まるなチップの嬉しいキツスだよ

兵庫縣 家沢薺花

上品に見合がすんで腹が減り

世話方に頼まれ相撲見ずにする

春なれや造花を抜いて梅をさし

あの顔で心の年は廿才とか

面構え黒田節なら似合うらん

性典へいや秀才の多いこと

小説で男心を知りつくし

徹夜したその名文に誤字があり

再軍備

湖ざいのように軍備の音を聞き

熊本縣 西口如川

心機一轉人間になる積り

島遣い乍ら求職して仕舞い

支出面こうも人件費が嵩み

徳島縣 姫田夕鐘

月一で貸す人の顔見詰めたり

吹雪するする角帯で逢ひに行く

岡山縣 福島鉄兒

着せかけりや男嬉しい顔で去に

巻き上げて見れば哀れな男なり

旦那又次の二号へとりかゝり

岡山縣 直原湖月

泣いたのは他所の子針を持ち直し

はつたい粉姑の塩に逆らへず

菓子呉れるお隣りへ子は入りびたり

鍛冶屋病んで村中が静すぎ

子を産まぬ約束をして式を挙げ

肺故に冷たき母と子は知らず

岡山縣 高山朗笑

ぶら／＼ごまた山に来る心あり

ストもなく百姓神の如く生き

岡山縣 服部十九平

徹夜する書齋へ炭をそつとつぎ

仲人が来る日應挙の軸をかけ



金と暇かけたが映えぬ旦那藝

岡山縣 大森 娛句 樂

逆境にふと迷信が氣にかゝり

地下室へ味覚の春が来て並び

兵庫縣 若林 草 右

パチンコにメ飾してもう稼ぎ

新家庭餅乾をくのは彼氏なり

大阪府 水本 無 盡

背負ひ投げする様に母は子をおろし

尾をまいた犬のあはれさ我に似て

岡山縣 水田 草 骨

先輩の座談に一つ教へられ

父としての子の生意氣がたのもし

大阪府 中村 た だ み

尻向けてどつかと座るのもモデル

子に肩をたゝかせ土工雨に厭き

熊本縣 花岡 英 子

活花をほめてもうたお茶をいれ

雨漏れの雫を容も受けて見る

大坂市 木村 水 堂

挨拶が済んで奥菌のガム外し

素晴らしい家建てましょう共稼ぎ

大坂市 東 喜 久 堂

ざらにある顔ですぐさま忘れられ

税務署の次に基準署煙がられ

大坂市 表 天 貧

スキー服あはれ女房のスカートに

かたくなゝ人にもお水いたゞかせ

大坂市 木村 千 代 男

廣前の杉は四抱え五抱え

年頃の色は空色の海の色

大坂市 阿形 一 杉

玄関へいきなりミシン駆えておく

信仰が築くお城の如き屋根

レントゲンかけてからだと医者逃避

下関市 阪田 良 坊

閉合せ妻君出たて言ひそびれ

下関市 石川 侃 流

この奥で金貸しますの小さい文字

パチンコで親父に煙草買いで

教壇を降りれば娘というこなし

作家まだ見果てぬ夢を追つて逝く

母の謎知らぬ振りして又甘へ

掛声の割に後押し押しとらす

信心をすゝめた人もふしあわせ

徹夜して儲けた金が医者へ要り

競輪の招待も来る名譽職

腕力でいかぬパチンコくやしがり

煙突の宿命雨に風に耐え

再軍備いそげと解除され

妻の娘の口論父として叱り

美しくいから出来心にしておこ

再婚を親にすゝめる娘に育ち

不器用は妻に卵を割らせて居

自動車路に寝る子を持て余し

安眠を看護る如く月が照る

いまに見ると云ひつゝ貧乏してゐます

子を叱る声も小さい氣の弱り

云はでもこのことで反感ばかり買

存在を無視されてゐる存在さ

冷たさと頑固さが娘を家出させ

仁術である筈などと明治もの

同級の娘を嫂さんと呼べるかい

玉ネギのやうな頭の無作法さ

恋人を神様だけに打ちあけた

試験場外には風が揚つてる

引越にやぐら炬燵のある二号

寝そべつて女三人密柑むく

名女形男に戻る幕が下り

辞める氣が卓に両脚のせて喫み

清盛をまねて法衣をかき合せ

氣兼ねた声で養子が豆を撒き

久淵の友に養子を養まれ

現在は墮すというた子に頼り

昭和の子金にぬけめもなく育ち

情婦にも似たる心を我もち

にわたりをよぶ老母の声わかくし

岡山縣 田垣 方 大

石川縣 那谷 光 郎

大坂市 木村 水 堂

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 表 天 貧

大坂市 木村 千 代 男

大坂市 阿形 一 杉

下関市 阪田 良 坊

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 木村 水 堂

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 表 天 貧

大坂市 木村 千 代 男

大坂市 阿形 一 杉

大坂市 阪田 良 坊

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 木村 水 堂

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 表 天 貧

大坂市 木村 千 代 男

大坂市 阿形 一 杉

大坂市 阪田 良 坊

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 木村 水 堂

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 表 天 貧

大坂市 木村 千 代 男

大坂市 阿形 一 杉

大坂市 阪田 良 坊

大坂市 東 喜 久 堂

大坂市 木村 水 堂

たっぷり
愛嬌たっぷり
B1 たっぷり

疲勞と脚氣に

メタボリン

錠・注・無痛注



座談 句を中心

没食子、春巢、竹莊、梅里の四氏と編輯部から梨里が参加して不朽詞で座談会を開いた。いつもの顔ぶれとはすこし違つていたので興味が深かろう。(編輯局)

没食子 一年程前からの「川雜」を調べて来る様に云われてたのですが、僕は体の調子が悪かつたので、二月号の「柳塔」から提出させていたさします。

ねんねこで背負て哀れな父の髭 (淡舟)

最近通勤の帰りにねんねこで子供を背負うている三十五六年配の御主人を見掛けました。大麥氣の毒な感じにうたれました。その人は髭がなかつたのですけれど、髭があつたとすれば一層僕には哀れな感じがしたと思います。男女同士の世の中ではありますけれど、凡そねんねこで子供を背負うている男性の姿程見じめなものはないといつも思います。

春巢 没食子さんは髭があるからやな(笑)

没食子 実私私も子供煩悩であり、子供をねんねこで背負う

た経験は随分持つていますが自分の恰好が自分で分らないだけに、あの頃の恰好の悪さをつくづく思い出します。

竹莊 没食子さんが「父の髭」の句を提出されたのは振るつていますね。没食子さんのちよび髭が有名なので、それと考へ合せて何かほゝえましい氣がします。

春巢 「哀れな」と断定しているために余情が少い様に思はれます。

梅里 やむを得ない家庭の事情であつて、父としてのその髭のある事によつて自身も卑下している事と思ひます。

梨里 男性が子供を背負つている図を大麥慘めとか何んとか、深酷な批評をされましてが、私はこの句をそれ程深酷には思ひません、と云うのは作者が非常に軽くよみ流してゐるからです。「哀れな父の髭」と云つてゐるのは、こ

の父親が髭をはやしていたから、その髭が子守をするのに應はしくない、と云う程度の軽い見方で、家庭の事情や生活の深酷さはあまり感じませぬ。ねんねこの下からは、矢張り女の着物が見えてこそ一番釣合つてゐるので、この人は髭を生やしているから相当の年配の人と思ひますが、赤か紫のねんねこを着た姿はちぐはぐなものです。そうしたところを掴まえて、句にしたまでだと思ひます。

没食子 先程春巢さんが「哀れな」と云う所に余情を持つてゐる場合矢張り原句の「哀れな」か「さびしい」かのどちらかの表現があたつてゐるのではないでせうか。それから下五の「父の髭」ですが、父の髭でこそこの句は句に成つてゐるのだと思ひます。かりに「父であり」とか「父の顔」

では拙い句になるのと違ひますか。

梨里 勿論これではいゝのですが、私はたゞ、軽く詠んだ句であると思つてゐるのです。没食子 深酷な句であるとは思ひません。ねんねこで背負つてゐる云うところに甲斐性なしに見えると思ふ。普通の背廣であればさうまで思ひませぬ。

竹莊 漫画になりそうな句ですね。

没食子 漫画になりますね。春巢 何か先生のお話の中に「心境を詠め」と云うのがありましたが、私は元來客観描写が多くて沢山句を詠んだ中にもあまり心境を詠んだと思はれるものが見あたりません。そこで私は心境を詠んだと思はれるものを特にさがしまして次の二句を提出いたします。

仁術は死にたいものに息をさせ (草右)

肺なので落語もちよつとだけ笑ひ (朱人)

勿論この句は作者が医者であることを知つてをりますので、心境を詠んだと私には思はれました。二の句は作者が病人さんであるかどうかは知

りませんが、確に心境句であろうと思ひます。私も医者としてしまつて云う医者句の句や病氣の句は特によく目に付きませんが、近頃ストマイ等の新薬が出てきて草右氏の仁術の句に同感いたします。それから毎日患者に接しまして朱人氏の「肺なので」の句もその心境がよく表はれてゐると思ひます。こんな句は医者や病人でなくても勿論作れるでせうが、医者であり病人であるところに一段と佳句であると思ひます。

竹莊 春巢さんがこの二句を提出された事は、実に面白いと思ひます。仁術の方は病人がもう死と云うことを覺悟してゐるのに、医者の方からどうしても助け様と思つてゐる句で、「肺」の方の句はどんなにしても死にたくないで笑ふことにも氣を使つて自分から生き様と努力してゐる句で対蹠的な所に面白さを感じました。

没食子 一の句は、今竹莊さんの云はれた意味の外に、中七と下五から想像しまして、心中とか脳溢血等で倒れた人、所詮生きてゐない、又生きたくない人を医者な人がために救ふと云う意味が含まれてゐると思ひます。二の句は深酷な日常の闘病生活の一面を吐露してあまりあると思ひます。

梨 里「肺なので」の句は、

先程病人でなくても作れる句だと言われましたが、私は作者自身が相当肺と云う病のために深酷に苦しんでいてこそ生まれた句ではないかと思ひます。世間で一般に面白い物とされてゐる落語を聞いてさえも心から面白く感じられない、自分の病に冒された生命と云うものが常に頭を離れないからでしょう。そして此の心境を唯そのまゝ読み流さずそうした自分を他人として客観的に見て始めて生きた句になつたのだと思ひます。一肺なので」と大袈裟に云ひ切つて「ちよつとだけ笑ひ」と云う表現の仕方ともいと思ひます。私はこう云う様に自分と云うものを客観視した主観句が好きです。

梅 里「仁術の句は見方によつては老人の死或は長患いの人或は自殺する人の様にも見られます。私はこの場合、自殺として考えています。と云うのは、どれ程死に直面する病人であつても、口では死にたい」と云うてを つても矢張り生に對する執着はあるものと思ひます。自殺の方として考えますのに、私の知人に一度自殺未遂に終つた者があります。其の者の心境を聞きました所、この人は投身自殺

ですが、飛び込む瞬間は夢中で、水に溺れる瞬間は思はず

「助けてくれ」と叫んだそうです(笑)。幸ひ浅かつたために(笑)生命びろいをしませんが、さてもう一度死ぬ氣には絶対にならないと云う事を聞かされました。此の場合若し氣絶して居つたならば、必ず医者の手によつて、何等かの蘇生法を構じられると思ひます。そうした時に始めは死にたいと思つたが、その時には助かりたいと思つてゐる

出席者

- 市場 没食子
- 北川 春巢
- 水谷 竹莊
- 松江 梅里
- 麻生 梨里

事でしょう……。没食子「その人は本当に死ぬ氣であつたのかな。梅 里「狂言ではないんです。没食子「狂言ではないにしても、よくく死なんならん深酷なものやつたのかな。梅 里「それは、確かに……。没食子「肺なので」と云う

出方の表現は好かんですが、

梨 里「私はこの押付けてるところが良いんですが。没食子「何か氣になるが、梨 里「確かに眼ざわりです。竹 莊「確かに耳障りやな、大分死ぬ話や病氣の話が出ましたから、一寸私の晶の句を出します。逢史の電話眞面目に應對し(七面山)

私がこの句を提出しましたのは私がいつも此の様な立場になつて困る様な事がありますので(笑)余計此の句に共鳴いたします。彼女から呼出しの電話が掛つて来た時に、その傍に偉い人や同僚が居るとハッキリした事が云えず、まして女からの呼出しがかつた電話と悟られないために眞面目くさつて返事をします。女の方ではそんな事は分らないものですから、眞面目な返事をされる物足りないうらしく、腹を立て、余計からんで来るので、こちらは慌て、しまつてどつてつけた様な返事になつてしまします。没食子「こんな経験はありませんが、ちよく見掛ける事がありません。中にはアチャラ語で周囲の人にカモフラージュしてゐるのに遭遇します。春巢さんどうですか。

春巢「遠慮しときます(笑)。梨里「ちやん河か……。

梨 里「私等こんな落語で聞いただけで(笑)。没食子「大体深い仲の逢引程、眞面目に受話機を持つてゐる様です。梅 里「この場合電話は女から掛つて来た様に受け取れます。いさゝか私の体験談を申し上げます。私は何んとかして逢引きに行くべく、その口実を狙つて居る時に若し電話が掛つて来たと思ひます。折り悪しう人が多勢居るために聞くだけであつてこちらの意を通する事が出来な。しかしどこそで何時に待つと云う事だけは耳に止めてをけば、後は「はい、はい、毎度有難う」で切つてしまします。それから後に、今度は私が出鱈目なダイヤルを廻してブーブー云つてる送話口に自分の取引関係の名を呼出して、「それでは、何時に御伺いたします」と云うて堂々として出て行きます。没食子「先程梅里さんは、女から男に掛つたと云われましたが、この句は男から女に掛つたとしてもいゝんぢやないですか、春巢「どちらにでもとれますな。梅 里「では私は次の句を提出しよう。温泉に居る間に糸の値が

さがり (薔花)

私の友人で屑縮屋から一躍糸扁成金になつて相当豪華な生活をしてゐたHと云う男、御多聞に洩れず金に飽かして祇園の賣れつ妓を落籍して、お定りの格子作りならぬ和洋折衷のお囲い者までもうけました。間もなく伊豆、箱根ドライブを試み、逗留の宿でたまたま盲腸炎にかかり、(えらい精しいな声あり)二週間ばかり静養中にあの糸へんの暴落に会い、またく中に一朝の夢と化し、遂にはその女とも手を切つてしまひ、現在は消息不明です。それと思ひ合はしてこの句は私が作りたい句であります。その後私はその女の消息を知りましたが二度の左襟を取つていました。

そこ私ので私の句が、句出来ました。糸へんと切れて三筋へ返り咲き (梅里) 没食子「此れは丁度あの頃の記録であるから、糸の値が下り」でいゝんですが、株の値下りにした(次頁下段へつづく)





二番目の川柳村

丸山弓削平

に、先行した弓削のあり方に彼は
膝を叩いた。氏の親友三木泰山氏
が、私と共に新聞コソントの常連作
家である関係から、昨年の夏、泰
山氏を通して川柳指導方を私に依
頼して来た。私は早速「農村文化
運動と川柳町」と題して長文を寄
稿し、農村と川柳の大業性につい
て説き、町村は一つの特徴を持た
ねばならぬ事を強調した。それは
軽部の指導者達の心を痛く揺ぶつ
たもの、如く、当面、川柳一本に
決めて強力な運動をし始めたので
ある。

出席した。雨の夜を二十五名が参
集した。私はその時のことを路郎
先生に報告して、軽部は必ず川柳
村になると断言した。私の予言は
大言を吐く様であるが今まで外れ
たためしがない。そして予言す
からには、それ相当地理由を持つ
ている。その一つは指導者の人
物、二は会員の質、三は環境であ
る。

（前頁より）
とところで「温泉に在る間に株
の値が下り」でもいゝんぢや
ないですか、鉄でもいけます
ね、そう云う風に動きます
ね。
梅里 それはそうかも知れ
ませんが、たま／＼あ、云う
世の中にあつたから、矢張り
糸がうつりますね。
没食子 一應整のうてゐるか
ら、抜く事は抜けますね。又
實際動く動かぬと云う事にな
つてくると範囲が狭くなつて
作り難くなりますね。
梅里 まあ時事吟ですな。
春巢 糸であるところがいい
ような気がするんですが、
後の時代になつて我々程糸と
云うことがピンとこないでは
ないですか。
没食子 そうですね。そこに時
事吟の生命の短かきがあるの
です。

投げた石が水面に波紋を拡げて
行く様に、川柳町運動は全国にそ
の反響を得なければならぬ……
と、昭和廿四年十月、私は弓削川
柳社が主催した西日本川柳大会の
席上で斯う叫んだ。次いで第二回
の大会に、水素原子弾は誘発を起
すとゆうときの新聞記事の例をひ
いて、川柳村川柳町が各地に誘発
して生じなければならぬと強調し
た。第三回も同様の事を述べた。
第四回も亦この事を叫ぶであら
う。そして、弓削の川柳町運動は
縣下に大きな刺激を與えたと共に
全国的な注視の的になつたが、
宛もそれに應えるが如く、今
新しい川柳村が岡山縣下の山村に
営々として造られつゝあるのだ
である。

昂揚した。私が曾て句集「吉備園
子」に、一村三十名の柳人を獲得
すれば、岡山縣は一万有余の大川
柳縣になる。といつた言葉を將に
実現しようとしてゐるのである。
私達はこの川柳欄に華々しく活躍
した訳であり、又弓削川柳社の実
相が廣く紹介された事は停せであ
つた。その頃、弓削の東南、岡山
縣を従走する一連の山脈を隔てた
赤磐郡輕部村に一人の理想家が
いて、この川柳欄に活躍する弓削の
柳人の意氣と、川柳を文化運動に
するそのあり方を、情熱の瞳をも
つて黙々と凝視めていた。私がこ
れから紹介しようとする二番目の
川柳村、輕部村の平和文藝會の指
導者政田大介氏その人である。

大介氏は明けて三十九才の働き
盛り、村会副議長の要職にある
が、予てから村起し運動の夢を胸
中に画いている情熱の人である、
その文化運動の一面としての文藝

私達は輕部村の指導者をするに當
り、これが容易ならぬ難事業であ
ることを知つた。実は輕部には一
人も川柳をやつた事のある人が無
いのである。全くこれから始める
人許りで、それに、前に述べた様
に山脈を隔てた、行くに岡山を經
由しなければならぬ十六里の遠い
土地である。従つて句會を開いて
直接に指導することが出来ない。
句會を持たない初心者許りを紙上
の指導でその成果を挙げるには如
何にすべきか、私は当惑したので
あるが、私は私の情熱を傾ける以
外には方法がないと考えた。情熱
を打ちこんで選をし批評をし指導
をし激励すれば、それは必ず人の心
をうち、人の心に響くものである。
私の小さな努力は大介、泰山、
三四詩氏其他の先達つ人々の熱心
な運動と相俟つて、次第に普及の
輪を拡げて行つた。

私は二回の選評後、九月に輕部
を訪れて、輕部村初めて句會に
出席した。雨の夜を二十五名が参
集した。私はその時のことを路郎
先生に報告して、輕部は必ず川柳
村になると断言した。私の予言は
大言を吐く様であるが今まで外れ
たためしがない。そして予言す
からには、それ相当地理由を持つ
ている。その一つは指導者の人
物、二は会員の質、三は環境であ
る。

弓削川柳社出身である藤本潤年
氏が山陽新聞夕刊に川柳欄を設け
た。選者路郎先生の名選と相俟つ
て近縣にまで恐しい勢で川柳熱が

大介氏は明けて三十九才の働き
盛り、村会副議長の要職にある
が、予てから村起し運動の夢を胸
中に画いている情熱の人である、
その文化運動の一面としての文藝

私達は輕部村の指導者をするに當
り、これが容易ならぬ難事業であ
ることを知つた。実は輕部には一
人も川柳をやつた事のある人が無
いのである。全くこれから始める
人許りで、それに、前に述べた様
に山脈を隔てた、行くに岡山を經
由しなければならぬ十六里の遠い
土地である。従つて句會を開いて
直接に指導することが出来ない。
句會を持たない初心者許りを紙上
の指導でその成果を挙げるには如
何にすべきか、私は当惑したので
あるが、私は私の情熱を傾ける以
外には方法がないと考えた。情熱
を打ちこんで選をし批評をし指導
をし激励すれば、それは必ず人の心
をうち、人の心に響くものである。
私の小さな努力は大介、泰山、
三四詩氏其他の先達つ人々の熱心
な運動と相俟つて、次第に普及の
輪を拡げて行つた。

私は二回の選評後、九月に輕部
を訪れて、輕部村初めて句會に

（潤年）
妻を見て女でなかつた有難
さ
この句がわかり難いんです
が……………

る。当夜のパーティーに集つた人達の要を得た質問は私を嬉しくさせた。大介氏の腹心である泰山氏は、元海軍將校で豪放磊落、三四詩氏は大介氏の手となり足となるとゆう風な熱心な人、私が常に言うところの普及上の必須な條件である三人衆の形をとつてゐる。それを、披山、馬洗、花蜂氏ら年配の然る可き人達が深い理解と愛情で大きく温かく包んでゐるからである。

第三の理由では、軽部村が可成富裕な農村であることと、パスが唯一の交通機関である山村で、四國の津倉村が島である如く、娛樂に恵まれぬ土地である点である。

私は以上の三つの点を考察して必ず川柳村になると予言したのであるが、その予言は誤りならず、見る／＼内に会員を獲得し、その勢は隣村、笹岡村にまで伸び、國士戸川要平氏を始めとする二十数名の笹岡勢をも抱擁するに至つたのである。一方作句力も目に見えて上昇し、昨年末の山陽新聞記者川柳大会には三四詩、泰山氏等は堂々地位をせしめて初陣の功名を立てた。本年一月二十日、私は満年、笑泉氏と軽部の第二回目の句会に行つた。当日消防團総出の全村松焚虫退治の日に重なつて大量欠席があつたにもかゝらず約五十名の参加者があつた。近き將來に、軽部は恐らくは日本一の川柳郷になるであらうと私は確信する。

次に、軽部の会員の情況を解剖

すると、

会員数は本年一月末現在(即ち結社してから六ヶ月)八十九名、その内訳は男子六十五名、女子二十四名である。職業別は、農業四十三名、俸給者二十名、残りはそれぞれ家族である。会員の年齢は七十才以上二名、六十才八名、一番多いのが四十才の二十三名で、三十才の二十名がこれに次ぎ、二十才と五十才が十四五名で、二十才未満が七名となつてゐる。平均年齢が四十一才弱で、他柳社より可成り高いと考えられるが、又社会的な地位を持つ人が多いことも注目される。即ち、村議五名、PTA会長二名、教員六名、医師、歯科医師、農協組合長、同常務、村収入役、婦人会長、同副会長、それに、元大佐、元海軍中尉、元湖州國厚生課長、元校長二名、元村長二名、元婦人会長、元村議二名、登記所長、元農協常務元幼年学校外國語教官、其他現役旧役の区長や婦人会役員、民生委等々仲々盛り沢山である。

就てこの共通した構成現象は、一

つの有方なる発展的理由の要因として留意されなければならぬ点である事を私は述べたいのである。纏へて昭和二十四年の「川柳」十、十一月号に分載された私の小論「川柳普及の實際」を再読したい。それには川柳普及の方向を知識人に向けなければならぬと私は説いてゐる。知識人も又大衆であり、時代と共に前進する川柳は、一つにはこれら知識人層に普及の方向をむけなければならぬと、十数行に亘つて私は力説してゐる筈である。それは俳句の高浜虚子の例を引かずとも、わが「川柳」に於て、路郎師を十重二十重に取り巻く人を見ても充分うなずけることであらう。社会的地位と知識人とは必ずしも同一ではない。

しかしそれに依つてその大様の行き方を示すことになるのである。

軽部の会員のもう一つの注目すべき点は、婦人会員が比較的多いことであり、尙漸増の傾向が強いことである。四國の津倉村は、前田伍健先生の説明に依ると、明治の末、先ず婦人会に川柳が浸透して普及されたことである。私もこの先例を引いて強調したのであるが、婦人会長三宅五女氏、副会長長稻田満美枝氏ら或は笹岡村の元婦人會長戸川千流氏等が陣頭に立つて随分努力を拂われてゐる事である。婦人層に浸透することは、この村の普及の將來を確約するものである。

僅か半年前には一人の柳人もなかつた備北の農村に、句会も持た

ずして、忽然と百名に近い柳人を擁する大川柳境が出来上つた。そして尙引續いて、新しい家を建てゐる響の音、植の音の丁々々響く思いの、地方文藝建設の音が、今頼もしく力強く軽部村に鳴りつゞいてゐるのである。

薄の生一本を造る酒米は備前米「雄町」である。軽部は雄町の主産地である。しかも軽部雄町と謳われる最優良米の生産地である。

酒になるさだめや軽部村雄町先日も雄町品評会に、特選と一等賞は軽部の人が獲得してゐるのを新聞記事に私は読んだ。正に日本一の良い米どころである。川柳村軽部の柳人が、雄町で醸造された芳醇な正宗の味に劣らぬ名句秀吟をもつて、柳界を矚目さすも日近いであらう。

川柳は繁榮し向上しなければならぬ。活潑な川柳界の中に作句してこそ我々柳人は張合があるのである。従つて、柳人は川柳を普及する責務がある。同じく「川柳普及の實際」の冒頭に私は川柳する人を三つに分類した。その一は川柳を作句して己れ一人愉しむ人、その二は自分の周囲の人を集めて自分が愉しむ環境に安住する人、その三は、川柳を文化運動として普及する人、地方柳境の中小指導者達は第三の人になつて欲しいと私は要求してゐる。こゝに、第三の人、政田大介氏を中心とする新しい川柳村、岡山縣赤磐郡軽部村の大様を招介して、全國の柳兄諸賢の資に供せんとするものである。(一九五二・二・八)

賢の資に供せんとするものである。

梅里 〓 〓 〓 わかります。奥さん孝行には分りません。春巢 〓 〓 〓 これはね、その妻が褌掛けで洗濯でも一生命懸してゐる。それを見ていて成る程女の仕事はつらいなア、自分分は女でなかつた有難い。と云うのです。

浸食子 〓 〓 〓 僕は内助の功をたゝえた句ではないかと思ひます。所謂男勝りの女を表現した句じやないかと考えて分らないのです。

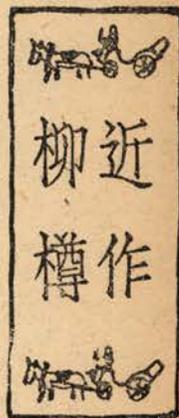
梅里 〓 〓 〓 何か妻が雑布の様にくたびれると云う様な句がありましたな。

浸食子 〓 〓 〓 それやつたら分ります。

梅里 〓 〓 〓 女は朝早いかわりに夜おそいぞ云うこつちや(笑)竹 〓 〓 〓 そうですがな、「夕涼みよくぞ男にまればける」と反対の表現の句ですがな。

春巢 〓 〓 〓 そうなんです。茶々さん満年さんが新年号に書いてはつたベターハーフを語るの記事でも別りますね。

浸食子 〓 〓 〓 そんなら分るな。竹 〓 〓 〓 浸食子さんはサイノロジヤやさいいな。(笑)梅里 〓 〓 〓 あんたみたいになんねこ着て、髭はやしてゐる人にはわかれへん(笑)。春巢 〓 〓 〓 こゝで、又始めにもどつて來ましたね。一 〓 〓 〓 そうですな。ではこの辺で暮にしましょうか。(POE筆記)



近作 柳樽

路郎選

四万台女將の最敬礼で発ち
旧正月の雪が列車を停めちまい 具塚市 河楊 梵鐘
故白井松竹会長
陛下にも観ていたゞいた文樂座
嬉しさは客の下足へ氣を配り
演劇人育成
そのうちに鳴くうぐいすと識つて待ち
故曾我酒家五郎

故曾我酒家五郎

同

同

同

タミ声を若い妓たちに取巻かれ
お年玉おもちや屋へ来て封を切り
子の親となつても親をまだ頼り
サボツテル様に木挽はひいて居り
税吏いて客にすぎない返事する
洋算笥肉屋の様に釣つておき
場にのまれ氣味で祝辞のモーニング
喜んでくれる妻あり起訴猶予
ナイロンの足から妻は着替する
家内安全朝ほのぼのさめしの湯氣
好況と不況と派手に入れ替り
石川縣 山田 陽々
臍繰りを出す女房の氣の強さ
落ち付いて亡き子を想ふ暇も出来
今年こそなどと云つて、五十過ぎ
五人連れ皆んな等外品を持ち
大阪府 西川 一舟
姉さんに濟まぬ妹の荷にミシン
外から見れば寒そうなガラス越
催促のない借金になをあせり
生きる道貞操云々云ふたどて
大阪府 横田 方眠
再軍備もう男の子おりません
奥様のお供お好み焼きをたべ
肩書が露骨な意見吐かさなない
愛媛縣 米沢 曉明
一年を厚さに見せたカレンダー
出張の案は里へも寄る心算

同

同

同

トラックへ人夫は寒い顔で乗り
轉ぶぞと見てるスケート轉ぶなり
競輪へ藥を掴みに来て寒し
政治貧困忍術使い出でんかな
パチンコの玉は入らず湯ざめする
スクーターの落ちつく先は二号邸
老妓わびし名優みんな死んでゆき
百姓をしてます余生うらやまれ
廣島縣 黒本 芳泉
帶止のヒスイの色も夏となり
手を握る位じや炬燵物足らず
本望は一号の家で頓死する
晝間だけの夫婦ですッと母に告げ
子の日記ドン・キホーテ想わせる
福岡縣 日高十姉妹
北の人らしい旅装に梅が咲き
村八分されて氣樂な日が続き
浮世とは尼寺にまで子を生まれ
春を漕ぐのどかさ禪がたるんで來
行商の氣持も知らず雨が降り
今治市 長野 文庫
家計など知らず大学迄行く氣
豚なればよいに困つた子沢山
御通知できまる値上げに腹が立ち
惡智慧を笑話雜誌に教えられ
賠償予備會談

同

同

同

取り止めた命を借金取がまち
具塚市 芝 無骨
お元日附添べつの声を出し
面會が其後の景氣見せに來る
一番違いの宝籤をば葉にし

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雜筆春秋



櫻の句に

安川久留美

光陰機関銃の如く、もう櫻の時季になつた。

大小を質に置いても夕櫻

之は私の古い駄作で、時代めいたところ、無声映画の畜物である。三、四年前の四月に大阪の路郎さんが金沢へ來た時、短冊にさくらの句を所望したら、

夕櫻とんぼ返りがして見たしの句を書かれた。

「僕の櫻の句は之れくらいなもんや」と笑つて居られた。生前亡き劍花坊氏が宿で画箋紙に達筆をふるつた句に、

櫻から柳へそれる落し差

といふ之も畜物らしいのがあつた。その筆痕が何処かに残つている筈だ。当時その一枚、劍氏がうつかりと「柳から櫻へ……」とかいて反古にしようとしたのを、弘法も筆の誤りとして裂かず、主計町の女將にくれてやつた、柳から櫻へ外れたのは正に彼女たちの花見の意にも取れたわけである。もう一枚、

御貴殿はぶたれ拙者は投げられるの丁蓄物の吟もあつた。

扱て路郎さんの前記「夕櫻」は現代句、とんぼ返りして見たいという主観は軽く、ま

いゝ人が出来たか寄らぬ日がつつき
 儲けたら御礼するよと云ふて去に 岡山縣 船曳 吞長
 頭より顔ばつかりが試験され
 懐手してパン／＼に養はれ
 握手だけしてやつたのに凶にのつて
 アベツクで来たとは絵は書き書いてなし 鳥取市 森本法泉水
 出迎のないお土産の置きどころ
 待つたなし飛車に未練を残しつゝ
 恋人が出来たを知つて欲しくなり
 凡人の生活へ日記こま／＼と 東京都 松井 蛙声
 目刺焼くけむりも父と食べる味
 小切手帳こぼり切れぬベンを出し
 歩を合す肩に粉雪いぢらしく
 風邪引いたとたんに女房甘え出し 香川県 中山中納言
 犬飼えばパチンコ迄連れて行き
 無礼講でも上役は聞き捨てす
 豚の尾で死ぬ冬の蠅あわれなる
 仲人は役得ある事まで洩らし 長野縣 高峰 柳兒
 税務署に商才もろく虚をつかれ
 いゝ智慧を頼めば金が先に要り
 手切金取れる強味をけしかける
 波の音なるほど曲になつてゐる 京都市 若山 圭草
 かゞり火の次第に強く春の宵
 乳房吸う強さへ母性意識する
 レコードへ合せて唄う妻若し
 人形を大事がる子でものたりす 岡山市 坂井 三葉
 せめてもの見栄は手錠え笑つて見

逮捕術訓練

犯人は型の通りに来て呉れず
 軽鉄の驛長切符も賣つてくれ
 卒業が待てずパーマを当てに行き 兵庫縣 酒井ひかる
 何時の間におかつばの娘が満十九
 ボマードが未だ要る父のしやう様

藝術か知らんがにきび迄写り
 洋装も和装も似合ひ不倅せ 大阪市 石田 沐天
 舟解へ泣けてくろなフェミニスト
 三角四角やつさもつさして切れず
 おまわりへ旦那とよんでてれくさ
 神様の御心ですと医者は逃げ 吳市 松永四季無
 物賣りに猫の眼ちよつとあいたり
 さんと暇税務署さへもやつてこす
 スケートへガム嚙むゆとりまらたす
 いゝ年をどれづにひがんだ賣のり
 僕にまで云ふなど不平たしなめる
 すきな酒一汽車延ばすことにきめ
 パクチ打同志一番風呂で合ひ 吳市 余頃 紅兒
 男なら女ならよと名をさがし
 ニンニクの臭で鉄の話する
 面会日クビの手紙をこづかり 具塚市 津田 千舟
 入院の順に死ぬなら次は僕
 入院の仕度炬燵も縛られる
 がやゝと女房ばかりの座談会 宮崎市 野口卯之助
 持つて来てまでは支拂してくれず
 まないたにどうもせよと死魚の眼が
 子がなくて女小説読み飽きる 玉野市 渡辺あきら
 はるばると来て薪割らされる
 裏門があつたと知らず座り込み
 パフの音もそつと夫を覚すまじ 大牟田 新谷 風浪
 算盤がパチンコ玉に見えて来る
 病院もいゝとこ恋を知つたここ
 正月二日御無沙汰の手紙書く布 味 滝 純香
 年よりは若いと医博に保証され
 爲朝の子孫と此の頃やつと知り
 恩給がどうのこうのと大手前堺市 八木摩太郎
 花束の恣長廊下折れてゆく
 ランシャ机親父のバツク光るなり

養子の立場

木村水堂

こと花の宵を偲ぶ櫻の句である。殊に洋服
 姿で洋杖をつくのがならわしの作者が近視
 眼で見ると櫻はこの感じを興へ、即ちこの
 句が生れたことと思へば、笑ましい。
 路郎氏の短冊は誰に渡つた？ 宿をした
 三笑も死んだ。憶かあの魚安の二階——路
 郎さんに興へられた一室、四月二十七、八
 日の晩春は思い出多く、私は路郎氏や森の
 家君と共に芳醇を交した一夕が夢のやうに
 浮んで来る。

敗戦のお蔭で、云いたいことも云え、し
 たいことも出来て、女性も男子と同じ権利
 を有する様になつたのは、それは一般世間
 のことである。
 僕の家はアメリカカさん式で、女尊男卑
 である。
 家族構成の数字からいつても五対二で
 あり、戸籍面でも筆頭者は奥さんで、僕のは
 統柄欄にその夫となつてゐるのだから、
 これは当然の結果かも知れない。
 それに奥さんの臂力は僕より強い。この
 上ヤラ(柔術)の手でも知つていられたら、
 僕は始終投げとばされて居らなければ
 ならない。いたすらを叱ると、
 「お父ちゃんきらいや、出ていけ！」
 と子供までが云う。
 今更乍ら、母の感化力の偉大さに驚く。
 諸事全般、奥さんの下風にある僕に、た
 だ一つ、世帯主という、経済的責任だけ負
 わされてゐる。
 小抜つた者は養子に行けない、と自負し
 ているが、紛糖三合あれば……が、やはり
 社会の通念である。

悪企み我が身に帰るとも知らず 出雲市 久家代仕男
 献金も賣名沙汰でさげすまれ 同
 パチンコで儲けただけわ喫ふてみた 同
 看護婦の匂ひ和服に泌みてゐる 堺市 丹波 太路
 艶開が有つて昇給又遅くれ 同
 お神籤にまだ籤が附く初詣うで 同
 改心を担保に母の金を借り 岡山縣 岡田 夜潮
 來客へあせつて帯が見当らず 同
 納税へ女將日頃の意氣を見せ 同
 早口を買われてバスで飯が食え 岡山縣 松村 怠坊
 女帯ネクタイ程に締め替える 同
 試験済みだと言つて闇の耐を出し 同
 稅務署へ入試の様に書かされる 和歌山 淺川 桑南
 何のためラヂオをかけた話好き 同
 經五分追悼碁会幕を開け 同
 鉄瓶の湯氣和やかに春へ立ち 大和 岩垣 日本村
 妻の手はボケツト迄も行届き 高田市 同
 頑丈な土壁で暮らし痩せてゐる 同
 新聞にのる程親を慈しみ 高槻市 福田 丁路
 軍資金足らず苦戦の恋敵 同
 貞操が危機一發で以下次号 同
 紅一点金歯がすぐく光つとり 岡山縣 神辺 操山
 新妻の行水音を立てすにし 同
 すわる娘にスカート一寸短かすぎ 同
 のど自慢俺より下手なのも唄い 兵庫縣 吉原 紅月
 結婚もし度し遊んでもいたし 同
 待呆けへ粉雪ようしやもあらはせ 同
 禁酒した友とも知らず松の内 岡山縣 北口 草人
 初雪へ少さいのから先に起き 同
 解除の日記念のアルバム出して見 同
 御燈明代佛間の写真苦笑い 岡山縣 伊藤 駄佛
 おかしさも別々に笑ふ倦怠期 同
 お茶を汲むだけで私は女事務 同

裏返しても座蒲團破れて居 鳥取縣 亀崎 漫歩
 食へもせぬ見舞を病人チラと見る 同
 不用心至極と鼻上つて來 同
 難問へ隣も頼杖ついてゐるた 貝塚市 武安 嘉彦
 功成つて母國の女慾しくなり 同
 サントスにて
 アリヅナの奥から逃げてバー勤め 同
 誘惑へネオンウイंकする如く 廣島市 福岡葉留路
 年頃どいうのにこけしまだ集め 同
 アベックが自動扉で隔てられ 同
 滯納を氣にせぬ友は頓死をし 米子市 勝田 正郎
 鏡掛け乙女の思慕を繻いこめる 同
 赴任した日の印象が練名され 同
 家庭愛炬燵のぬくさにもあふれ 愛媛縣 渡辺 曉童
 頼杖で電氣のくらしいのに氣づき 同
 聞きのがしならぬラヂオえの音をたて 同
 もみくちちされてレツスンから歸り 貝塚市 住谷 石舟
 梅活けて病床の春も遠からじ 同
 パチンコで俺の根氣を見つけたり 同
 父と子と交替で飯たく日なり 愛媛縣 村上 旭童
 未知数の大を信じて子に頼り 同
 父親は一步さがつて指揮する氣 同
 感情のもつれに妻の髪がゆれ 京都市 佐久間折草
 私には仲居で御座る髪の艶 同
 もう一度金策に來る故郷の町 同
 かみそりも軽う動いて日曜日 貝塚市 小島さぎす
 春うらら試験終つた戎橋 同
 アンケート目玉焼なら出來るらし 同
 病む妻に聞くはだし昆布の長さ 京都市 村本 香果
 作業義手音して煙草火をつける 同
 先輩の大きな声が國訛 同
 特價品都落ちした柄ばかり 鳥取市 武田八方茶
 張り紐で我慢の出來る暮しをし 同

北支部同人の、新春親睦会から以後、僕の信用度が稀薄になつたことは事実で、それからは、句会に出るたび毎に、「今晚はもう、戸を締めときまつせ」と奥さんは仰言る。
 養子の立場を護持する必要上、鮎美さん、古方さん、水客さん、紫香さんの連名でなくとも、その中のお一人さんで結構だから、一泊の証明書を戴きたいものである。

水よりも濃ゆしわが娘の肩をもち
 舞養子子供にまでも侮られ

酒放談

表 天 貧

私は日本全國で知らないところは北海道ぐらいと云う、永い土木技師生活のあと、官廳生活で一番嫌ひだつたおまわりさんと、海軍下士官時代を除けば、余りにのんびりしすぎた酒に明け暮れを送つたものである。

今尚ほ入口をはいれば臍が鼻の先にある鶏舎のようなちつぽけな家に、大家族を養ひ暇さへあれば作句三昧、碌でもない迷句を自作自選、一人悦に入りながら好きな酒を呑んでいる。昔変らぬ阿呆の姿、これが天貧の実態である。未だ四十の若さで誰の眼にもつく程白髪がぐつと増えたと同時に、最近胃のあたりが少し痛む。空腹になれば痛み瀧腹後も二時間程は痛む、虫でもないらしい、至つて小食故に原因不明。白髪は生活の疲れか、胃は酒のためか、どちらも自分は否定したいが、否定の理由は根拠のあることではない。たゞ酒に原因すると云はれることが此の上もなく苦ししい。俺がいゝ手本だ酒に止し給へ 豆萩

細雪ひくアコーデオン 鉄の足 東京都 田中 稻水
 カモを待つ女將火鉢ヘダイヤの手 同 同
 三男に生れブラジル 憧れる 貝塚市 山田 月舟
 面会へ米の相場を聞いてみる 同 同
 大河さうさう人智逆ろうてあわれ 石川縣 塩谷三思楼
 捨台詞間も効果を添えてくれ 同 同
 毒舌に口を合せたお人好し 愛媛縣 藤田 博人
 生きて行く自信が出来て折合はず 同 同
 新妻の幸福すぎる 姫鏡 京都市 田中 南桑
 三味線は苦手ですわとパーマの妓 同 同
 妹の帰宅が知れる 流行歌 大和市 戸田 悦子
 目と口を書けば笠置になる 漫画 大和市 同
 伊勢灣も輸出に光る ネットクレス 高田市 戸田 嘉一
 玉串を捧げ恩師の意をささどり 同 同
 釘の出たところへかかるフライパン 貝塚市 上阪 朱人
 便利だというのが妻の長ズボン 同 同
 お料理は雑誌の智慧か別な味 大和市 野田 勝豊
 指の爪赤しダンサーらしくみえ 同 同
 先生は雲眺めてる 試験場 貝塚市 池内 両成
 基礎工事終えたところで予算切れ 同 同
 パチンコの玉でアリアバイっと立ち 岡山縣 井野 格一
 名刺など必要でない地位に居り 同 同
 見られては困る手帖を届けられ 岡山縣 岡本 薫翠
 初恋をしてる日記を何処へ置こ 同 同
 分納に税吏の馴れた口をきき 大阪市 三木 泡起
 交替に白衣焼酎飲みに行き 同 同
 提灯の雪玄関で振り落とし 岡山縣 峰尾 魚々
 申分ないがと鼻のことに触れ 同 同
 入学日親も虚勢の形で出る 下関市 中村九呂平
 食慾の子はかけ茶碗氣にもせず 同 同

見世物ではないと交番首を出し 岡山市 山本 焦兒
 藁屋根が写真に載つた立志傳 同 同
 左遷とは云はず愚妻と荷をまごめ 米子市 小西 雄々
 鏡台がすなり婚期を待つている 同 同
 朝ぎりに湯の街ふかくござされて 尼ヶ崎 赤木 紅山
 粕汁の湯氣に眼鏡がまたくもり 同 同
 通勤のたのしみ女事務に腕をかし 奈良縣 平井 良兒
 今年こそ療養の飯かみにかみ 大和市 池戸 桃村
 糊等も賣つてちよろこいぜにもうり 池田市 浅野 精亮
 課長さんの返事は首を振つてすみ 和歌山 滝谷 右郎
 初旅の宿は鼠にみくびられ 熊本縣 鹿本 実信
 恋のみれんをた切ハサミなにもか 鳥根縣 星野 侑正
 我が癖も治らぬまゝに四十過ぎ 大和市 松元 利行
 湯の町へ掛取りに來て雪に逢ひ 下関市 向田妻楊子
 だらり帯やつぱり京の灯が恋し 岡山縣 河野 徳丸
 野良ばきの軍靴にいやな連想ぞ 岡山縣 森川 東南
 共がせ妻はお先へ帰ります 大和市 平井 立茶
 初辰さんへ行くまでもう酔つはら 大和市 山崎帆加夫
 待たされて氣づいた花のない事務所 和歌山 岡崎 泰三
 療養の我れにも有つたローマンス 京都市 倉田 錦川
 元日晴啄木の詩のこゝろしる 貝塚市 多炭 若柳
 行く先を云わずに弟髪を分け 富山縣 島村花都辞
 ひな祭り新に戦災思い出し 香川縣 安倍 寛子
 水引を取る手遅しと中を開け 岡山縣 大橋 中洲
 農民の声をきかぬがにくらしく 岡山縣 田中 敬貢
 ニュールツクちどガニ股が氣にかかり 豊中市 橋 左近
 時間待ち見せた手相が氣にかゝり 岡山縣 森尾 不老
 貧乏は税の不平を輕う聞き 高知縣 岡本 元馬

しく眺みました。野介兄には何かまどまつた評論を見せて貰いたいものと期待致します。全誌を通じて先生が一番よく活躍していられることに今更乍ら頭が下りました。潤年兄が有益な書評を発表され結構でした。(中略)このころ身体の調子がややよろしく朝から午後四時頃まで床の上で書見することもあります。冬眠を実行した結果と思われ、寒い間はこれをつづけ無理のないようにと心掛けております。それに一大朗報を耳にしましたので一層元氣づけられっております。

それは去る二月二十九日のNHKで、アメリカNOA放送として傳えたもので、只今アメリカでは肺結核の新薬が発見されハビニオンとか申しましたがよく聞かされませんでした。試験中ですが、わが國から留学生の河辺正三(医師?)の國際電話によると、マイシリンとパスと違つて、結核菌を殺す薬で、試験中の結果はよく、製法も比較的簡易で、大量生産もでき、よいことづくめの新薬で、結果がよければ今夏には公表、二二年の内には日本にも輸入されるだろうとの事でありませう。これが実現すれば人類の一大福音で、小生如き重患も浮び上がる時が来ることゝ、多大の希望を抱くに至りました。もう一、二年は何として生きのびたいと祈つております。敬具。

一七・三・六一

山之内
妊避の**ため**に
サニター
 セツト 250円
 上 20錠90円
 同 50錠180円



絵ごころ詩

戸田古方

十で神童、十五で才子、二十でぐればただの人。童謡や自由画の選手たちはいつの間にかどつかえ消えてしまいます。藝能の有名人がみんなこうというわけでもありませんが、不朽の名を残すのはそのうちの何人かにすぎません。

私はこれを「童」「凡」「聖」の発展形式とよんでいます。「童」の時代とはまだ常識がなく、たくまな面白味があります。「凡」に進むと今まで知らなかつた理窟はわかつて来ますが、へんてつもなくありません。そして「聖」に至つて勿論世間には通じながら、それを乗越えて融通無碍の世界に入ります。このことをかつて「川柳雑誌」(二七三号)に書いたことがあります。

近頃これについて少し考へたことがありますので以下述べてみたいと思います。

一口に「童」「凡」「聖」といいますが、そう素直にはまいりません。ことに「凡」は全く手段としてありませんが、その手段としての「凡」が「童」とどうつながっているかということがその考へるの要点です。

即ち「凡」の中を更にこまかく「童」「凡」とわけられそうなの

です。又「凡」と常識化しても、「聖」へ進む前にはもう一度「童」にもどらなければならぬとも考へられます。

昨年はマチスやピカソの展覧会があつて仲々はやりましたが、画聖が画聖となるまでどんな歩みをしたかを一寸考へてみました。

デッサンを抜きにして絵を描くなどということは私には考へられませんでした。近頃の子供たちはそのデッサンをせずに堂々と作品を作っているのです。勿論私のいうデッサンとは石膏を木炭でかくあれですが、相当の作品を作るようになってからやつとデッサンの稽古にとりかゝつていっているようです。

喚べたいと身体が要求してはじめてその欠けた栄養をとるといふ最近の教育の考へ方をこゝでも実行しているのでしょうか、デッサンもしない子供に何故相当の作品が描けるかは私には疑問でした。

子供達は童画時代からもうつづけていけるセンスというエスプリというか、それを伸ばせるだけのばしているのです。

近代絵画は未開人の作品にヒントを得たと申しますが、写真発明

以後写真を要求されなくなつて、轉回しはじめるとその表現の手段はむしろ素朴な未開人のひたむきな三昧境が世にも貴いものになつて来たのでした。

私の知つていゝ画人がデッサンから抜け出して如何に下手にかくかに苦勞すると申しますが、マチスやピカソのものを見たりよんだりしますと同じような苦心のあとがはつきりつかめるのと、奇怪ともいふべきある絵に魅力すら感じはじめるのです。

近頃の子供の絵は正に「童」「凡」の歩み方であり、ピカソなどは「童」「凡」「童」「聖」の一本道を開拓したものと見えましよう。

ピカソ等は奇のために奇を描いているのでなく、絵を愛するあまり、この道より歩けなかつたのでしよう。その愛美の心の正直さは欲望を否定し切れなかつた大聖釈尊に比すべきものをさへ感じるのです。

この心は文学ことに短詩の世界にも反省すべき多くのものを與へているように思ふのです。

モチーフを一句に仕立て上げるまで私たちは燃焼と推敲に相当の時間を費します。リズムと用語に苦しみもします。象徴と省略を考へます。

絵画の世界でも五百年前の技法そのまゝ、写実一点張りて押している人もあります。

文字それ自体抽象化され概念化されたものだから絵画の様にダイナミックな出来栄がないという人があるかもしれせん。

勿論文字の世界には写真の様な発明はありませんから絵と同じようなことはいえないのは事実です。それどころか視覚世界の省略以上のものを短詩はすでに発生の当初より行つていゝといふかも知れません。

成程、十七音字に想を結晶させるためにはピカソ以上のダイナミクスが必要でしょう。しかし遂にダイナミクスに慣れすぎて概念の化物になつていゝことも否めません。

川柳には川柳、俳句には俳句の型があります。かく考へて来た時我々は「凡」の世界に停滞してゐるといわざるを得ません。

季節という概念に毒されている俳句も「凡」境のものが多いいです。知的なうがちをならう川柳はより一層「凡」的で「童」からは呼べども答へられぬ距離にあるようです。説明も概念も知らない子供の素樸な素直なエスプリに触

れてみたいと思ひました。私の末つ子で尋常一年生の光治が「だからぶれつるとかめとをみつけたら」

といふ一句を教へもしないのにいつの間にか作つておりました。お正月用に私のかきなぐつた宝船の絵をみてつくつたのでしよう。いづれ門前の小僧で「たり」などと少々こましやくれてはいますが、大人なら鶴亀はつきものとと思つてゐる宝船の絵を、彼は裕々と分離させてゐるのです。

わけもわからぬまゝに何かしら本當らしいものにふれる「童」眞理を心得たつもりでおりながら、いたづらに他人の尻の赤さを笑ふ「凡」そして自他ともに宇宙の法則にそむく事は出来ないと自覚されてはじめて「聖」に近づいて行けるのです。

それは句を作りつゝ句を作つてゐることすら忘れる、三味の境「凡」「童」混然たる中から生れてくるのです。

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式会社
フタバカツプ株式会社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 2812 2813



モデルのある句

句の巧拙は別として、身辺をモデル化した作品に就て諸作家にお訊ねして見ました。(編輯局)

水本無盡

母親のお経へ寝間から手を合せ
の兒でそれとにべもない。とにかく七年目に出来る兒「ごちらが生れてもいゝよ」と妻と話し合つてゐる。

市場没食子

針の尻押しして儲けた貯金帳
針の尻で大体御想像がつく様に、和服仕立物で儲けると言つて別に大それた儲けなど一家の主婦にして考へも及ばぬが、兎に角子供三人高、中、小と学校へ通はせるのも一公務員の僕には荷が重たい。その荷を軽減して呉れているのがこの針の尻で、モデルは言はなくても最愛の妻である。僕の柳歴と家内の針の尻押歴とは略ぼ似ていて共に二十七年何ヶ月である

荒木哲水

七年目身ごもる妻と春を呼ぶ
産婆さんの計算によれば五月八日が出生予定日だそうである。親の私とすれば五月五日に男兒を頼むたいが、これも産婆さんは女

新川博也

麦のびてきた〜母へあり

がたし

父がなくなつてはや一年になら。二度の戦災で無一物にされてしまつた上に五人のくらしを支えて行かねばならぬ。焼跡を耕して、出勤前は肥を汲み退社後は鎌をふる。日曜は買出しに出掛ければならぬ。戦争を怨み、社会を憎む。自己の生き方にさへ嫌悪を覚える。どうにでもなれとも思う。しかし、戦前の豊かなくらしを愚痴りながらも、そうすることが当然のようにコツ／＼と働いてゐる母の小さい姿がある。荒れ切つた母の手がふと浮ぶ。

村松夢裡

親と子と描く理想に夜を更かし
家庭生活に就て子供と論究、理想論で連夜を更かしました。が現実のきびしさなぞ論外です。若い者には尾をまきます。

菊澤小松園

拾い屋へ話しかければよく喋り
無口そうな何時もむつつり屋の拾い屋。子供を抱いて佇つていた、とある一日、一寸話しかければ突によく喋る。関東の震災に会い妻子を無くし大阪へ流れ着いて小店を開いて居たが又ぞる戦災で亡失。諦め切つた世の中の隅から隅への生活が始まつたことなご、そこにも人生の哲学があり、汚れた世の中への論議があること

川柳とBK

★BK川柳の会では、放送川柳募集の選者を廿六年度は四柳社十二人に依頼したが、廿七年度に於てはBK独自の企画で、選者を六ヶ月に三社で六人制に改めた。詰り同一選者が年二回繰返して選句を担当することになつた訳である。放送予定プロ並に、募集規定は次の通り。

放送日 課題 選者

- 四月十二日 「共稼」 麻生 路郎
 - 五月十日 「子供」 岸本 水府
 - 六月十四日 「雨」 福元 紋太
 - 七月十二日 「裸」 菊澤小松園
 - 八月十六日 「デパート」 近江 砂人
 - 九月十三日 「宵空」 延原句沙彌
 - 十月十一日 「折詰」 麻生 路郎
 - 十一月十五日 「履歴書」 岸本 水府
 - 十二月三日 「多忙」 相元 紋太
 - 一月 日 「晴」 菊澤小松園
 - 二月 日 「苦勞」 近江 砂人
 - 三月 日 「靴」 延原句沙彌
- ▼廿八年一月―三月の放送日は未決定
- 締切―放送月の前月末日迄の到着便で投句を締切るので、なるべく早く出すこと。
- 応募句数―一枚のハガキに三句以内。
- 賞―入選三人(各五百円)
- 入選三人、佳作十五人、全部に選評プリント贈呈
- 投句先―
大阪市東局区内馬場町
大阪中央放送局、BK川柳の会
発表―毎月中旬近江土曜日の午前七時十五分―市民の時間

物故川柳人調べに就てのお願い

終戦前後から約七八年の間に多数の柳人が亡くなつていたので、今年の盆には天王寺本坊か、ごつかで物故川柳人追善柳大会を開くことにしたい。なるべく多くの遺家族の方に且参会を願ひ、故人の應ぐれた話を聞かしていただいと申つてゐるが、遺族の現在の住所の不明なのが多いので、物故柳人の柳友の方々に左記による御報告をお願いしたい。(御存じの分だけでも結構)

- (一) 物故柳人の姓名、雅号
- (二) 亡くなる現住所
- (三) 遺族の現住所
- (四) 其他参考になること。

尤も、追善川柳大会と云つても、しめつばい会はやらぬつもりである。それは故人の靈もよるこぼぬであらうし、なるべく朗らかな企画を持ちたいと思つてゐるので御挨拶が願ひたい。

ローカル第一放送
★路郎主幹と放送
三月廿二日午後十時五十分―十一時。BK第一放送ローカル。
「おやすみ番組」で「私のふるさと」を放送。
なお放送日未決定で「おやつつ時間」(午後三時―三十分)に「心を動かされた話」「失敗した話」の二篇を放送劇団員の別誌で放送。BK第二放送全国中継。

も私は知った。拾い屋の人生観そこにも又捨て難い人の世の一句は轉つて居る。

佐野牛歩

意地つばり意地を張るだけ張つて泣き

長男坊が仲々の悪戯ッ兒の上に誰に似たのか……いづれ小生が女房に似て居るのでしようが……随分意地ツ張り、それに少々叱られて泣かない程なんです、或日何日間か少しも学習せず、毎日野球ばかりして居るので「それ程野球が良いのならこれを持って出て行け」とグローブとボールを持たせ玄関まで引きつり出した処、例の意地を張り出し、出て行きもせず謝りもせず随分ネバリ、小生も一寸叱り疲れた頃「ワツ」と泣き出しました。後で自分の小学三、四年の頃を思ひ出し、ひどく叱つたのが可愛想であつた様に思ひました次第です。

田名部修三

絶望へ牛乳瓶の白いこと

徹夜の看病が二日続いた。一縷の希望を無理につなごうとして、然し親の目にもすでにこと終つたことが、判然としてゐた。病室に居な、まれず、階下へ降りて来た。そこに昨日と今日、配達された牛乳瓶が誰にもかえりみられず、に淋しく並んでゐる。三日前まであんなにおいしい／＼と喜んで居たのに……(句集「絆」から)

表天貧

生活にかまけて妻の装い

朝な夕なにみる貧乏妻の姿、甲斐性なき此の身を許し給へ。

水谷鮎美

カンテキの焰は子らをたのしませ

御存じの子沢山の小生、たゞ今は雨後の筍の如くすく／＼と伸びる子育て時代、おもちや筍をひつくりかえしたよう。月に二回のサラーの晩はすき焼と極めていませ。帰路の車中に子供らのあだ、かい顔々が浮ぶ。

西尾葉

若う言うてくれた人を妻はおぼえてる

「S君の家で一杯よばれてな、おそくなつたんや」
「Sさん言ふたら、心齋橋で逢うた事ありません」
「そや／＼おまへ、ようおぼえてるな」
「その時、やあ奥さんですか——四人もお子さんあるてきていますのに——えらう若うおまんねんなと言ははつたお方だつしやろ」つてな訳で、この句となりました。其の後おそくなつたらS君とこで一杯や言うたら女房がめしまへん。

金泉萬樂

友達が男ばかりの女の子

三女が生れてから実に十六年ぶり、小生が四十六才、妻が四十二才の終戦直前の七月、危うく焼失を免れた我家で、疎開もせず頑ばつていた妻が空襲管制下に産んだのが、四女の香子である。生後間もないのに母に抱かれて、出来損いの防空壕で蚊に喰はれた憐れな子だが、案外に風邪一つ引かず、こゝろツ／＼と達者に育ち、この四月からの入学を楽しんでゐる。ところで困つたことに、近所に女の子の連れがなく、臍白共に交つての明け暮れに、男の子同然の言葉遣いには全く聞いた口がふさがらぬ。句は昨年春頃の作である。

戸田古方

日向ぼこ子供に雲を見に立たせ

風あたりをさけた日だまり
「おや又かげつた。さう、まだ雲ついでる」
子供は素直に立つて向うの富の隅から北の方の空を見上げる。
「もう一寸だけ」
親父は眺みかけの本の頁を裕々とめくる。

宮島天眞

お婆さんと言はれたと妻五十歳

男でも嬉しくないのに、まして妻は老いたりといへども女ですから……

社の黑板

川雜青年部生まる

「川雜一」に青年部を作らうと云うので三月九日の午後六時に、川柳雜誌社で世話人会を開いた。不朽副会員の博也、哲水、愛論、春柳、正司、梨里の六氏にオブザーバーとして鮎美氏に出席して貰い路郎主幹と膝を交じえて協議した。会名は「川雜青年部」一員資格は満三十九才以下の男女。会費は不要(何かやる時には臨時費を徴集することにした)。

川雜千日前連絡所の廢止と今後

千日前連絡所を二月廿六日限りで廢止した。各地から來阪された方に判りにくいと言ふのが、大きな理由の一つである。

川雜柳談会の開設

川柳の研究を目標に川雜柳談会の第一回を左記によつて開設することにした。
日時 四月廿七日(第四日曜)
午後一時から五時まで

会場 川柳雜誌社
出席資格・川柳不朽副会員に限る
雑吟一句持参の事。武玉川初篇の下記五句をあらかじめ研究しておくこと(納豆に抱かれて寝たる梅の花・夕立に思ひ切たる船のうち・嘘をつけたの大三十日来る・祭が済でもとの明店・冬籠独口利く唐本屋)
別に案内は出さないからお含みを乞う——

「川柳雜誌」の舊號
バツクナンバーの欲しい方は往復ハガキで問合せ下さい。
在庫の有無、値段等お知らせする

一品料理と生そば
グリル 芝鶴
上六キヤピトル映
画館 東三軒目

瓶の銀山
大坂市大津區長柄
西通一丁目四番
山銀硝子株式会社
電話 京都 四四七番



いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確
▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社三月句會 (大阪)

三月一日(土)午後六時

於 大宝文化館

路郎師の柳話はバックボーンのある人になれと云ふことで、例により実例をあげて面白く話された。鮎美氏は句の鑑賞法を説くに「川柳塔」より満年・小松園両氏の句を京都支部句報より烏雀氏の句を弓削支部句報より弓削平氏の句を岡山縣廳支部句報より大甲帽氏の句を玉野市文化祭句會報より魚々氏の句をあげて短評も加えられた。いつもの句評とは少々型を破つて時々出席者に句意について質問されるなど街頭録音のアナウンサーよろしく頗る興味をひいた。兼題「拾い屋」は満場ごよめく笑声の中で披露が終つた。当夜の不朽洞賞カップ把持者は橋本線雨氏であつた閉會は九時半。

出席者 路郎・一杉・ゆづる・喜久堂・夢裡・春柳・正司・黙・平・天真・淡舟・水堂・修三・緑雨・文蝶・栗・春巢・雅集・三司・鮎美・哲水・没食子・万樂・無盡・いわを・友見・美恵子・佐喜子・古城山・古方・澄風・博元也・天貧・柳水・ひとし・十字路・仲生・花村・塔仙・牛歩・梅里・恒明・帆加夫・愛論・小松園・柳亭・へとち・霞乃・梨里・P O E

兼題「家出」 麻生 路郎選

家出の子女劇劇見て歩き 七面山
親切に饒舌らし家出だまつてゐ 葉光
貞操を賭けて家出の派出な事 十九平
春うらら家出の虫がまたおこり 梅里
無事である事だけ家出知らしき 没食子
家出した理想覗き世と喰ひ違ひ 帆加夫
家出した理想が負け世と喰ひ違ひ 喜久堂
廣告欄家出へ報が負け世と喰ひ違ひ 栗久堂
連絡船の隅のシヨールは家出ぬき 栗久堂
金切れて悠々家出帯つて来 船加夫
家出とも知らず連れ子は歩かされ 帆加夫
家出していま生甲斐の日々に居る 博也
つかまた家出に連れが出来ていた 花村
曾根崎署家出を悟すのに疲れ 花村
家付の娘家出の藝もあり P O E
家出には大阪あんまり大きすぎ 春巢
家出記事時候のせいになされてる 花村
不孝者奴かと思へど保護願 十字路
家出した事にして不始未受けず へとち
結局はズカを見に来た家出なり P O E
死にますの家出一言云ひのこし 無盡
家出するパーマ二三日前につけ 春巢
金のある間家出の面白さ 文蝶
家出してわびしかりけり青い空 春柳
家出人も知らぬラチオの先廻り 一杉
家出今日レジャーモードに合せ 小松園
探めたあと映画に行くこ出たまま 梅里
西北に家出した娘が居るそうなる 友見
家出して夜汽車に乳が張つて来る 小松園
而当ての家出そのまゝほつこかれ 梅里
家出する朝も机のちりをふき 文蝶
誘惑にはつきり敗けてする家出 愛論
子にわびて夫にわびて家出する 愛論
うすく母は家出を知つて持ち 春柳
用意周到家出 蝠蝠を待ち 緑雨
新聞の記事で家出の意地が折れ 万樂
橋筋で家出の抱持ちあぐみ 修三
ゴットンと汽車は家出の娘もせて 同
黄昏の街へしよんぼり家出する 愛論
黄昏の街へしよんぼり家出する 柳

(人) 春でした夫も家出をしてしまひ 柳亭
(地) 家出の娘に叱らん説と叱る説 栗
(天) 家出とは知らず待つて午前二時 緑雨
(軸) 家出した過去が母にもあるのなり 路郎
会話課に家出して来たのもまじり 同
兼題「拾い屋」 菊沢小松園選
拾い屋が天気予報を聞いて寝る 十九平
拾い屋のしもやけかゆくなりはじめ 一杉
拾い屋も社会と比例した景氣 牛歩
寄せ屋から拾い屋嫁を持たされる 黙平
拾い屋の後へきれいな陽が落ちる 三司
拾い屋が少年の日は夢をもち 正司
拾い屋が先輩に訊く犬の持ち 修三
拾い屋のコースきつちり決まってい 梅里
拾い屋の孤独家拾い屋 嚔らす へとち
天誅の孤獨家拾い屋 嚔らす へとち
拾い屋もごみ箱あけて撰り好み P O E
拾い屋がよごして行つた朝の雲 春巢
悟りきつた顔で拾い屋拾つてる 天真
拾い屋が焚火へのそと来てあたり 没食子
拾い屋に素通りされる暮し向き 春巢
拾い屋をして、も主義はまげられ 十字路
不景氣な世相を拾い屋身に感じ 水堂
警戒の目をひろい屋は見えて通り 柳水
サーピスに拾い屋をこき掃つて去り 花村
拾い屋に拾はれてゆくラペッター 帆加夫
拾い屋のうらみ重なる犬を飼ひ 夢裡
拾い屋の犬はきつちり喰つてゐる 古方
拾い屋に家計の無駄を見すかされ 古方
(人) 拾い屋に家計の無駄を見すかされ 古方
(地) 拾い屋の昔あそびの街を行く 葉光
(天) 拾い屋の内証で見た拾い屋の 萬樂
(軸) 拾い屋に話しかければよく喋り 萬樂
兼題「年度末」 北川 春巢選
予算セロにしてから年度末静か 古方
会計の鼻息荒い年度末 修三
年度末きれいな嘘に引つかかり 小松園
先任の判が出てくる年度末 古城山
年度末帳簿が合へば春む話 季贊

袖カバー破れ氣にせず年度末 愛論
年度末嘘八百の報告書 恒明
完成の工事にしとく年度末 へとち
順番に出張をする年度末 哲水
算盤が酷使されてる年度末 没食子
花咲いた事も知らずに年度末 文蝶
おかわりの出張が飛つ年度末 博也
納期の件やかもし云う年度末 澄風
マラソン金融思はねてない年度末 十字路
年度末予算が余つたあわてて 哲水
年度末予算が依然張り切る年度末 正司
年度末居残り組の中に僕 没食子
外泊のだしに使つた年度末 梅里
年度末社長ごそり株を賣り 小松園
辻褄が何うにか合つた年度末 七面山
年度末予算委員は温泉につかり 淡舟
何へんの会社か派手な年度末 梅里
ホーナスが噂に終つた年度末 十九平
(人) 年度末またベン先を替えてゐる 博也
(地) 年度末おまけに三男坊ができ 鮎美
(天) 年度末ふいに因果をふくらめられ 花村
(軸) 年度末きりぎり予算案通過 春巢
席題「コレクシオン」 新川 博也選
コレクシオン 枯れ草のたまで撫で見る 無盡
掃除だけ誰にもまかせぬコレクシオン 修三
本業が留守にたつたコレクシオン ゆづる
先輩の面子にかけたコレクシオン 梅里
コレクシオン父の浪費に氣をつかい 文蝶
先代の氣魄が知れるコレクシオン 古城山
コレクシオン見せたいだけのお茶の會 塔仙
生活がゆるす範囲のコレクシオン 水堂
コレクシオン イトコハトコに頼んできき 梅里
思い出が一つ一つあるコレクシオン 澄風
コレクシオン 一應貫つておく切手 葉光
悪趣味と言はれ乍らのコレクシオン 三司
悪人を訪へば狸のコレクシオン 春巢
敗戦のおかけ世に出たコレクシオン 水堂
コレクシオン 昔の生活し捨て切れな 鮎美
いごはんの逝く昔コレクシオン皆倒れ 小松園
金高にするコレクシオン落日なり 小松園

コレクシオン今日もゴジが一つ増え
味喰く妻に言はれたコレクシオン
新妻に共鳴させたコレクシオン
けつたに癖けつたコレクシオン
(人) 参考に刑事も見るコレクシオン
(地) 悠々と拾つて帯るコレクシオン
(天) 一行に一人別れるコレクシオン
(軸) やまがたの舟のかたのコレクシオン

席題「トビツク」 小川

首を切るトビツクをニユース春寒し
町内のトビツクをきく夕の膳
トビツクも尻目に女秘書の服
すれた儘トビツクあちの記事になり
度の強い眼鏡トビツクに頬をつき
大袈裟に給仕トビツク知らせに來
トビツクの遺骨が濡れてゐる港
トビツクへ電光ニユースは流れゆく
トビツクえ遠慮している新入社
トビツクのきれいな嘘に引つかり
朝つばからトビツクつきぬける
写真まで入れてトビツク書き立てる
聞き役にうってトビツク夜が更ける
晩酌へ話題なか／＼つきぬなり
ハリウッドの話題へ輝輝かぜ
話題残して突然辞めたタイピスト
トラブルトビツクトビツクにまわっている

トビツクの銀行守衛だけ増やし
椅子引き寄せてトビツクをきき直し
トビツクの満洲いつも夕焼ける
席題「コミツシオン」荒木
コミツシオン妻へは正札ごつておく
家も建て二号も置いたコミツシオン
コミツシオンお辞儀までもかわつてき
年に似ぬお固い事コミツシオン
一寸口きかたけなりコミツシオン
コミツシオンに抵抗出来ぬ酒をうづ
コミツシオン秘書心得た折靴
コミツシオン他処の相場を聞かせられ
コミツシオン貫い名刺へ走り書
コミツシオンそらくきいた声になり

天眞 花村 澄風 天眞 春集 愛論 万樂 博也 恒明選 澄風 古城山 花村 古城山 小松園 水堂 春柳 小松園 牛歩 万樂 正司 愛論 默平 春柳 文蝶 柳水 小松園 哲水選 正司 牛歩 春柳 十字路 澄風 帆加夫 鮎美 花村 万樂 愛論

コミツシオン庭の鶯聞きながら
ぜんざいでいご内氣なコミツシオン
コミツシオンOKクツクシオンぶく掛け
丸火鉢ぶくばらんにコミツシオン
コミツシオン次第仲居猪口を受け
贈賄の高が合はれない調へ室
(佳) 大阪のよきコミツシオンでくらせませう
(軸) コミツシオンで替えた壘の香にひたり

句集「心の燈」出版祝賀會

二月十七日 於 阿倍野王子神社

祝盃に校長さんの安來節 馬洗
祝盃は今日一日の儲け高良 兒
祝盃に竹馬一人が泣いてくれ 田吾作
祝盃の用意したのに次点なり 忠美
祝盃にただ泣くばかり泣くばり 友はよし祝盃ごつと押しよせる
祝盃を挙げに恩師もやつてくる 仲生
祝盃へ母もこたつて出て來たり 里十九
祝盃に約束された明日の椅子 天貧
祝盃へダイヤは光るだけ光り 嗣骨
祝盃へ妻も苦節の二十年 裸木
祝盃へ後れて來たが受けこぼし 沒食子
祝盃を重れて年齢に触れずある 三司
祝盃へ悪友鮎美は正座する 豆秋
先生の祝盃鮎美正座する 日本村
祝盃の強い弱いはぬきにして 香林
祝盃へ母が正座に直される 小松園
祝盃に時間せわしく幹事立ち 白柳子
祝盃に過ぎ昔がかけめぐる 幽王
祝盃へ母還曆の背の丸さ 鮎美
祝盃へ恩師としての座を設け 淡舟
祝盃へアツマコートを脱いで出 一杉
祝盃へ梅一輪の窓を開け 野介
祝盃へ今日日は潰れてよい積り 恒明
祝盃に選手は頭低うたれ 夕削平
祝盃に選手は頭低うたれ 三四詩
祝盃に選手は頭低うたれ 葉光

フラツシユに祝盃高く高く上げ
祝盃へ襟をただして立ち上り
祝盃へ最後は兄弟だけ残り
祝盃にアンのコックも注ぎに來る
祝盃の足りぬ舟をとり
祝盃は酒鮮出さぬ氣前よし
祝盃へ妻も一さし舞うてくれ
こぼすまい句集の出來た祝盃ぞ
母居ます方へ祝盃高く上げ
祝盃に袴のしもしもうれしけれ
椿紅し君と別る、山の駅
椿一りん無縁ほどけへ陽があたり
山肌をひとこ赤く椿染め
椿落つ春の頁へ書へ日記
純情を捨てず椿の花が好き
分校は椿咲く岡海が見え
寒椿子は叱られた手にちぎり
三疊に僕と椿と原稿紙
出戻つて椿と暮す二三日
てんらくのなんなのはおちつげき
こりてチンマリあかい椿を挿し添え
産衣縫ふガラス越しな寒椿
ふさ衣との夢はあざやかに
落椿アンの緋あざやかに
幻影の住む椿なり独り居る

善き人の椿一輪満ちたりぬ
椿は紅しふるき想ひ出
雨雲に追はれるやうに驟に下り
電源を啜つて雲は逃げてぬ
アバートの四階雲に親しむよ
お天氣を話すに雲の色も添え
ほめるものなし冬の雲をほめ
いわし雲右トツトリの道しるべ
入道雲父の怒つた顔に似て
ファイルターの講釈をして雲を見る

東京をばと 離一とすじ アへの橋地下映画食道街
梅里の店 大萬
★大万川柳(第十四回)を募る 兼題「出前」 路郎先生選 締切・四月十五日 句数五句以内 発表・四月廿一日 (店内に掲示) 御投句は大万宛・ごなだても

現実には夏夢輪廓はがし行く 案生子
輪廓の四角は消さぬまゝの色 紫郎
ボクの輪廓ボクが知つてから孤独 磔
輪廓を残し画論の灯をともしす 小秋
植木屋と余生楽しいお茶をのみ 昭子
花咲かぬ身のまま余生孫と居る 昭子
余生なぞ思ふいとまもなく稼ぎ 案生子
いくばくもなき余生ホケンをなかりて 好浪
むくばれぬ妻をなはる日々には 磔
白湯たぎる余生静かに妻と座す 義行
残傷のはがゆく癒へぬ日向はこ 夢裡
拭はれぬ念ひいつしか雲を追ひ 草の助
再婚の話しに痛む胸の傷 昭子
恋の指手へ触れまいとして母 紅壽
残傷へドライマが残傷を大きくする 晴芽
ラジオドラマが残傷を大きくする 豊次
残傷の甘い記憶に浸たらうよ 司郎
並木の長さを恋となつて歩いて 藤郎
廻り椅子並木に光る風が見へ みてい
並木道打明けられぬ儘に過ぎ 榮三
市場から並木へ帯る乳母車入 榮三
雲水の笠いつばいにゆく並木 入仙
清浄な恋は並木を歩く丈い 入仙
午後茶房に雨の並木を見て一人 磔

下關支部句會(下関市) 二月十日 於長内一ノ宮 石川 侃流報

京都支部句會(京都市) 二月十六日 於仲源寺 村松 夢裡報



編輯局にて

★もうオーパーが要らぬようになつた。本号が諸君の手許にとどくころには櫻もほころぶことと思ふ★前号から少しづつ贅沢な編輯に移すことにした。表紙の四に何も組込まなかつたのでピツクリされた人もあつたが、カストムと云うものは怖ろしいもので、隅の隅まで読物を詰込むのに、憎れた眼には確に異様に感じられたのに違いない。しかし、表紙の四まで読物で埋める編輯はもう打切つてもいいのではないかと思つている。★北川春葉氏が「医者と病人」を寄せられた。筆者が医者であるだけに、一般的な読物としても面白く読める。★市場没食子、北川春葉、水谷竹莊、松江梅里の四氏に「句を中心に」を坐談してもらい編輯から梨里が参加した。経験派の作家達の眼に映つた句が、どんなものであるかが判つて参考になるだろう。★丸山弓削平氏が「二番目の川柳村」を寄せられた。次ぎ／＼に川柳村や川柳町が生れることは何よりの朗報で、日本が明るくなるような気がする。★私は別欄の「社の黒板」に

報じてあるように、月、水、金の午後三時から五時半頃まで、歌舞伎座の六階の関西藝能俱樂部に二月下旬から顔出しているの、私に御用の方は、こゝへ来て下さるか、電話していただきたい。常に外出勝ちな私のことであるから、わざわざ、宅まで来てもらつて不在では氣の毒なので、市の中央部まで自分から出向くことにしているのである。歌舞伎座の東の正面から這入つて、六階までエレベーターを利用していただけばよろしいので附近へお越しの節はお立寄り願いたい。★次号は本誌の三〇〇号記念特別号として刊行することにした。既に着々準備をすゝめているので、好読物が満載されることと思う。御期待御吹聴を乞う、★五月号を出して、五月の本社の会をすましたら静岡まで出かけることになつた。細光川柳大会(静岡川柳社主催)が開催されることになり、招かれて出席を約したからである。旅は楽しいものであるが、雑誌を持つていると、つい滞りを急いで会いたい人にも会えないことがある。今度は久しくあわない人にも会えるだろうと思つて楽しみにしている(路)

は二月末、晴峯氏と壽像の石膏像の件で白石氏訪問、原規は出来上りつゝあるので三月末頃には仕上るとの回答を得られたとのこと今しばらくお待ちを乞う▼寺井鏡々氏(兵庫縣)は二月下旬三重縣賢島に遊ばれ志摩觀光ホテルから通信があつた▼池沢樂居氏(姫路市)から一近頃姫路句会に覗かせて頂き自由朗さんと一緒に滞りたりは夷君らに自轉車で送つて貰つて恐縮して居ります。「マツチ箱の社宅それでも便所あり」の句信があつた▼中島生々庵氏(大阪府)は一月下旬以来、母堂が重態なので、心痛されて居る。一日も早く快癒を祈る▼三鴨美笑氏、米子市は一月下旬から胃が悪く二月初旬に吐血されたとのこと、攝養を祈る▼中内翠芳氏(大阪府)は市電交通局を停年退職された▼太田良子氏(大阪府)は大坂通信病院(眼科)を三月一日に退職された▼松江梅里氏(大阪府)は「大万川柳」が一周年を迎えたので記念句集を刊行記念川柳大会の出席者に贈呈されることとなつた▼福田安夢氏は大阪府西成区吉田町二〇に移轉▼松井可笑氏(廣島縣)は最近病氣やら中國配電竹原所長就任等で多忙だつた由。

不朽洞

▼須崎豆秋氏
は二月廿七日
夜 晴峯居て
栗、交蝶の四
人で壽像アロ

会から

花岡 英子氏(熊本縣)正
卜占氏推薦

新會員紹介

四月
花岡 英子氏(熊本縣)正
卜占氏推薦

動靜

▼本社三月句会は一日午後六時から大室文化会館三階で開催▼大阪市電交助会句会は三月八日午後五時から交助会事務所で開催▼大阪通信病院川柳句会は三月十五日午後二時から病院五階講堂で開催▼大万川柳一周年記念大会は三月廿二日午後六時からアペノ百貨店地下食通街近畿食堂で開催▼南区医師會文化部杏林川柳句会は三月廿五日午後七時半から瑞川居で開催▼南海鉄道川柳句会は三月廿七日午後五時より運輸教習所で開催以上何れも路郎主幹出席▼川姫路支部句会は三月九日一郎居で開催▼川雅岡

山支部句会は二月十七日満年居で開催▼勝山川柳句会(岡山縣)は二月廿六日中鉄バスで開催▼川雅岡支部句会(岡山縣)は二月九日笑泉居で開催▼岡橋宣介氏(大阪府)方に電話天下茶屋五九八七番が開通した▼岩崎勇記氏(山口縣)は小郡駅へ轉任された▼河野徳丸氏は岡山縣兒島郡福田町常盤町五丁目一〇八番戸へ移轉▼松下一徹郎氏(高知市)は藤水と改号された▼在間小樓氏(新居浜市)は巧湧と改号▼長宗白鬼氏(兵庫縣)の夫人が三月初旬から大阪通信病院に入院された手術後の経過良好とのこと▼大阪市電交助會文藝部から三月廿八日「川柳若草」が創刊された。

麻生路郎著 水武書房版



川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

(B6版 二二二頁) 定價一〇〇円 送費十六円

取次御注文は

大阪市住吉區内方代西五丁目二五
製書口屋大阪七五〇五〇

川柳雜誌社

川柳不朽洞會

指 導 麻生路郎
 贊 助 池沢樂居
 長谷川一徹
 笠原路生
 長野晴溪
 藤村一作
 淺田一雄
 中田守雄
 白川朋吉
 中村祐吉
 高安六郎
 藤村雅光
 田中辰二
 洞 友
 鳥山一步
 沖野三郎
 亀井辰修
 田村孝之介
 山本雨迷
 安川久留美
 山路閑古
 前田伍健
 柴谷宰二郎
 蛭子省二
 藤生霞乃
 橋本綠雨
 高鷺亞鈍
 沢田四郎作
 東野大八
 不朽洞會員
 特別會員
 中島生女
 奧村丹路
 武部香林
 戸倉普天
 浪 玲之介
 上田翠光
 木村孤浪
 一維持會員
 福田山雨樓
 寺井鏡々
 石井白面人
 戸田古方
 前山北海
 古川慶花麗
 内藤草一郎
 三輪晚翠
 水谷鮎美
 村松夢裡
 大坂形水
 藤岡至藝瑞
 井上湧三
 北林松代
 宮田不二
 西垣錦風
 川村好郎
 浜田久米雄
 築山快夢起
 西尾九栗
 永田里九
 高田抱逸
 小田沙兆
 市岡曉舟
 三鴨美笑
 林盆丘
 白砂旋風
 一正會員
 市場没食子
 吉田水車
 大西八歩
 須崎豆秋
 石曾根民郎
 正木水客
 黒川紫香
 丸尾潮花
 北川春巢
 布施鏡川
 尾崎方正
 櫻川不水
 好崎申仙
 菊沢小松園
 逸見灯竿
 清水白柳子
 鈴木九坡
 夷木一笑
 小川恒明
 徳永雅美
 大森風來子
 岡島嶺泉
 木下陶王
 福田妄夢
 中島鉄洲
 新川博也
 尼緑之助
 水谷竹莊
 小橋隆如
 弘津柳慶
 吉田圭井堂
 杉谷湖山
 増田耕民
 増弘半休門
 佐野卜占
 小西史葉
 小沢無鬼
 小鶴喜由
 吉田斜水
 山口秋水
 野本吞水
 土井文蝶
 小林文月
 大西野介
 龜山晴峯
 山根白星
 種瓜平
 渡辺孫拙
 福島正則
 富岡淡舟
 飯降白登
 中内梨芳
 西辻竹青
 長野井蛙
 林野甦光
 阿万萬滴
 間島青丹子
 上田春柳
 友淵貴山
 森下愛論
 太田良子
 岸井可柳
 松江梅里
 丸山弓削平
 直原七面山
 黒田笑泉
 上林粗影
 狩野燕子
 石岡正司
 西森花村
 河村日満子
 田代尋四
 家沢薺花
 藤本満年
 西口如川
 姫田夕鏡
 福島鉄兒
 直原湖月
 黒田久米女
 藤本茶々
 塩淡一路
 谷内一草
 福本鬮骨
 布村南扇子
 榎南夏六
 田中遊星
 西いわを
 高山朗笑
 杉山一貫
 家本富至
 横部牛歩
 服部十九平
 大森娛句樂
 長谷川三司
 荒木哲水
 山中志乃布
 桑原表情
 成瀬月仙
 若林春石
 足立泰雄
 中村五醉
 有働芳仙
 大西迷窓
 延永忠美
 黃瀬美秋
 地俱山風樓
 淡畑胡蝶
 阿形一杉
 坂田良坊
 石川侃流
 大森苑女
 安岡瑠枝郎
 長谷川迷路
 南木捨舟
 黒木彈正
 卒田一哲
 河村瑞川
 木村無名林
 田中鳥耕
 藤原虚水
 益永貞女
 大倉四案
 山田季贊
 山田鳥莊
 水本無盡
 水田草骨
 中村ただみ
 山本葉光
 東喜久堂
 表天貧
 木村千代男
 田垣方大
 那谷光郎
 野村味平
 木村水堂
 膳所新三
 花岡英子

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

就職(十句) 水谷鮎美選
 階段(十句) 杉谷湖山選
 プリント(十句) 吉田水車選
 溜息(十句) 小川恒明選
 (四月廿日締切)
 (五月廿日締切)

每号募集

近作柳樽雜詠廿句 麻生路郎選
 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
 文章(評論・研究・感想其他)
 (毎月廿日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
 ▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
 ▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
 ▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雜誌

B列5号 毎月一回一日発行
 第七卷 第四号
 一册 金四〇円
 送料(四円)
 半ケ年概算 二六四円
 一ケ年概算 五二八円
 昭和廿七年三月廿五日印刷
 昭和廿七年四月一日発行
 大阪市住吉区西内町四丁目二番地
 編輯兼發行 藤生 幸二 郎
 行印刷人 藤生 幸二 郎
 大阪市住吉区西内町四丁目二番地

發行所 川柳雜誌社
 大阪市住吉区西内町四丁目二番地
 電話 四七五〇
 郵政 郵便 大坂七五〇

行発日一月四年七廿和昭...本精刷印日五廿月三年七廿和昭 (行発日一回一月毎) 可認物便郵種三第自一月七年二廿和昭

THE SENRYU ZASSHI

NO. 299

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

平和の春を飾る

淡輪つご人形

4月10日→5月20日
豪華見流し20場面

入場料 大人50円、小人30円
30人以上2割引
☆日曜祭日 ごとにアトラクション

淡輪下車 淡輪遊園
急行臨時停車



南海電車